

新潟県刈羽郡小国町埋蔵文化財調査報告書 第5集

水 上 遺 跡

2004

新潟県小国町教育委員会

水上遺跡

2004

新潟県小国町教育委員会

序

小国町は新潟県のはば中央にあります。周りを300~500mの山に囲まれた小盆地で、洪海川がもたらした肥沃な土地がそこにあり、豊かな緑に囲まれた自然味あふれる佇まいの町です。

古くから小国郷（おぐにごう）と称され、33の集落が心を一つにして個性的な生活と文化を築き上げてまいりました。

洪海川両岸に広がる平坦地は、優良農地でおよそ600haの面積を有します。農業経営の省力化が盛んにいわれた昭和30年代には重要施策の一つとして土地改良事業が積極的に行われ、我が町の基幹産業としての農業を支えて参りました。しかし、社会進展に伴う産業構造の変化により、農業を巡る情勢は大きく変わってきました。つまり、消費者ニーズに対応し、米の価格安定を維持しながら豊かな農村環境の醸成を図らなければならないという難しい選択を迫られているのです。

こうした背景から、優良農地の高度利用を推進するために、県営ほ場整備事業（中里南地区）が導入されました。「水上（みずかみ）」は新町集落が立地する段丘から少し下がった西側に位置し、この度の事業区域に包含されています。

事業実施に先立ち、事前に確認調査を行ったところ、遺物の存在が確認されましたので、柏崎地域振興局農業振興部農村整備課から小国町教育委員会が受託し、現地調査を行ったものです。

調査は平成15年9月から行われました。その結果、想定していなかった弥生時代の土器や石器が出ました。しかも県内最大の石包丁の発掘は大きな発見であり、我が町の米作りが弥生の頃から嘗々として行われてきたのではないか？ ということが解りました。

その他にも平安時代、中世の遺物・遺構も同時に見つかり、我が町歴史空白域を埋める貴重な発見です。

この度の発掘調査にあたっては、新潟県教育庁文化行政課、柏崎地域振興局農業振興部を始めとする諸機関から多くのご指導・ご協力を賜りました。お礼を申し上げますと共に、深く感謝を申し上げます。

また、この調査報告書の作成にあたりご尽力いただいた皆様に心からお礼を申し上げます。

平成17年3月

小国町教育委員会

教育長 高橋 實

例　　言

1. 本報告書は新潟県刈羽郡小国町大字新町字水上25番地ほかに所在する水上（みずかみ）遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は県営は場整備事業に伴い新潟県農地部柏崎農地事務所（現柏崎地域振興局農業振興部農村整備課）から小国町が受託したもので、小国町教育委員会が平成15年9月1日～10月31日に行った。
3. 整理作業および報告書作成に関わる作業は、平成15・16年度に小国町教育委員会が行った。
4. 出土遺物および調査・整理作業にかかる各種資料（含観察データ）は、一括して小国町教育委員会が保管・管理している。
5. 遺物の注記は水上遺跡の略号「ミズ」とし、出土地点・層位を記した。
6. 本書の図中で示す方位はすべて真北である。
7. 造構番号は種別にかかわりなく通し番号とした。
8. 遺物番号は種別にかかわりなく通し番号とした。本文および観察表・図版・写真図版の番号はすべて一致している。
9. 引用文献は著者および発行年を文中に〔　　〕で示し、巻末に一括して掲載した。
10. 第VI章（石器使用痕分析）は沢田　敦氏（新潟県埋蔵文化財調査事業団）に分析・原稿を依頼した。
11. 第VII章（樹種同定）は株式会社　吉田生物研究所に分析・原稿を依頼した。
12. 本文の執筆・編集は池田淳子（小国町教育委員会）が行った。
13. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略　五十音順）

小国町シルバー人材センター　柏崎市教育委員会　柏崎地域振興局農業振興部　平野建設株式会社
新町集落　新潟県文化行政課　新潟県埋蔵文化財調査事業団　新潟県立歴史博物館
赤沢徳明　浅井勝利　池島嘉和　伊藤啓雄　春日真実　斎野裕彦　笹澤　浩　笹澤正史　佐藤友了
沢田　敦　品田高志　高橋　保　滝沢規朗　田辺早苗　鶴巣康志　戸根与八郎　久田正弘　三ツ井朋子

目 次

第Ⅰ章 序 説

1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査と整理作業	1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2

第Ⅲ章 調査の概要

1. グリッド・調査区の設定	5
2. 基本層序	5

第Ⅳ章 遺 構

1. 概観	8
2. 記述の方法	8
3. 各説	8

第Ⅴ章 遺 物

1. 概観	9
2. 記述の方法	9
3. 各説	9

第VI章 水上遺跡大型磨製石包丁の使用痕分析

第Ⅶ章 水上遺跡出土木製品の樹種同定

第Ⅷ章 まとめ

引用・参考文献

要 約

観察表

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	3
第3図 グリッド配置図・基本層序	7

第2図 調査位置図	6
第4図 石庖丁使用痕光沢強度分布図	15

図版目次

図版 1	遺構分割図 (1) A区10W°付近
図版 2	遺構分割図 (2) B区
図版 3	遺構分割図 (3) B区
図版 4	個別遺構図
図版 5	遺構分割図 (4) C区18S付近
図版 6	遺構分割図 (5) A区4V°・12X付近
図版 7	遺構分割図 (6) D区22C付近
図版 8	出土遺物
図版 9	出土遺物

写真図版目次

写真図版 1	遠景 大型石庖丁
写真図版 2	剥査前状況 各地区完掘状況
写真図版 3	各地区完掘状況
写真図版 4	各地区完掘状況 基本土層
写真図版 5	柱穴・土坑断面
写真図版 6	柱穴・土坑断面
写真図版 7	柱穴・土坑断面
写真図版 8	出土遺物

第Ⅰ章 序 説

1 調査にいたる経緯

刈羽郡小国町のほぼ中心に位置する中里南地区では、県営は場整備事業が計画され、平成14年から工事が開始されることとなった。これを受けて小国町では平成13年に分布調査を実施し、遺物が採集できた周辺と微高地部分には未周知の遺跡が存在する可能性があるため、試掘調査が必要であることを柏崎農地事務所に報告した。は場整備計画面積は46haであり、工事は数回に分けて実施される予定であるため工事計画に合わせて試掘調査を行うこととした。

平成14年10・11月は用水路・貯水池工事予定部分を中心に試掘調査を行い、平安時代・中・近世の遺物・遺構が検出できた地点を水上遺跡として登録した。平成15年4月には、面整備の工事計画に合わせて確認調査を行い、遺跡の範囲が北側に広がることがわかった。これにより本発掘調査が必要な面積を確定したが、遺跡は農地事務所と協議の結果、貯水池部分については工法を変更することで本発掘調査を回避し、バイオライン・用水路部分と田面で掘削を作った部分についてのみ、本発掘調査を行うことで合意した。調査面積は1,879m²である。

2 調査と整理作業

(1) 調査体制

現地調査の体制・期間は以下のとおりである。

試掘調査（平成14年度）

調査期間	平成14年10月14日～10月17日、11月11日～15日
調査主体	小国町教育委員会（教育長 高橋 實）
調査担当	滝沢 規朗（新潟県文化行政課 主任調査員） 金子 優子（新潟県文化行政課） 池田 淳子（小国町教育委員会 臨時職員）

確認調査（平成15年度）

調査期間	平成15年4月14日～4月18日
調査主体	小国町教育委員会（教育長 高橋 實）
調査担当	春日 真実（新潟県文化行政課 主任調査員） 松繩 降之（新潟県文化行政課 主任調査員）

本発掘調査（平成15年度）

調査期間	平成15年9月1日～10月31日
調査主体	小国町教育委員会（教育長 高橋 實）
総括	青柳 満（教育課 課長）
管理	相波 英幸（教育課 生涯学習係 副参事）
調査担当	池田 淳子（教育課 生涯学習係 主事）
調査補助	小川 薫 今井 智幸 田中 恵子 竹井トシ子 佐々木清明 青柳繁信 青柳信義 青柳光政 五十嵐勲 五十嵐栄治 五十嵐義孝 北原春治 小林勝弘 小林サトミ 小林法柱 小林隆司 斎藤勝 斎藤義和 鈴木信義
作業員	高橋一久 高橋幸子 田中弘師 角山一夫 中沢タツ永見カッ子 永見ミイ 中村永太郎 中村英巳 中村為哉 根津一代 野沢一成 野田チヨ 野田雄二 櫛口トシ 峰村キヨノ 峰村恵子 宮川ミチ子 山崎政行 山田順一 渡辺益郎

(2) 整理体制

整理作業は小国町民俗資料館で行った。出土遺物の水洗・注記作業、接合・復元など基礎整理は、平成15年12月～平成16年3月に、造構・遺物図版トレースや遺物写真撮影など報告書作成にかかる作業は平成16年5月～平成17年2月に行った。

主 体	小国町教育委員会	(教育長 尚橋 実)
総 括	青柳 満	(教育課 課長)
管 理	相波 英幸	(教育課 生涯学習係 参事)
担 当	池田 淳子	(教育課 生涯学習係 主事)
作 業 員	小川 薫	今井 智幸
		今井 義雄

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

刈羽郡小国町は、新潟県中越地方の山間部に位置する。東は関田山脈、西は八石山脈に挟まれ、周囲を標高400m前後の低い山々に囲まれた小盆地である。中央には東頸城郡松之山町の天水山を水源とする渋海川が南北方向に流れ、渋海川は長岡市下山で信濃川に合流する。渋海川により形成された河岸段丘は、信濃川流域のような大規模なものではないが、標高150～170mの高位段丘、100～120mの中位段丘、80～90mの低位段丘が町内各地に分布している。

水上遺跡は新町集落に隣接しており、現況は水田である。渋海川の右岸に位置し、ややせまい平坦地をもつ低位段丘上の微高地に立地する。0.5km南には横沢川があるが、改修される以前はや北側にあり、木造跡近くを蛇行しながら流れているといわれている。約1km北東の中位段丘上には縄文時代の遺跡があり、約1km北西には中世の遺跡がある(第1・2図)。

2 歴史的環境

小国町の遺跡を時代ごとに概観する。縄文時代の遺跡は丘陵上に多く存在するが、発掘調査が行われた遺跡は2例である。延命寺ヶ原遺跡は晩期中葉の集落であり、住居跡が検出されて土器も多く出土している。縄文時代中～後期の土器もあり、調査面積は少ないが、大きな集落があったと推定できる。太郎丸浦田遺跡は明確な包含層はないが、縄文時代晩期の土器・石器が数点出土している。菅野島郷土山遺跡は発掘調査ではないが、中期中葉ごろのほぼ完形になる土器が数個体出土している。一括施業の可能性が高く、集落の存在がうかがえる。標高の低い山々に囲まれていること、渋海川の支流が各地にあり、水を得やすい環境であったことから縄文時代には多くの集落があったことが推測できる。

古代の遺跡はこの数年の発掘調査により明らかになっている。鷦之島御館遺跡、七日町築先遺跡において9世紀中葉～10世紀初頭ごろの集落が確認できており、掘立柱建物などが検出され、石帯も出土したことから有力集落が存在していたことがわかっている。

中世は14～15世紀に小国地域を支配していた人物の館跡である御館遺跡があり、堀と土塁に囲まれた居館が明らかになっている[小国町教委2003]。七日町築先遺跡においては15世紀ごろの集落跡が見つかっ



第1図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時期	備考
1	納ヶ島	三浦市納ヶ島	縄文	
2	郷十山	吾野島字郷十山	縄文中期	資料館所蔵
3	水吉	法末字水吉	縄文中期	
4	池田	法末字池田	縄文中期	
5	法坂	法坂字南平	縄文中・後期	
6	上の原	新町字上の原	縄文後期	
7	国沢	武石字国沢	縄文後期	
8	延命寺ヶ原	太郎丸字大原	縄文中期～晩期末	昭和41年発掘調査
9	小岡沢城跡	横沢字音沼	中世	
10	釜ヶ入城跡	七日町字城ノ沢	中世	
11	大籠城跡	横沢字大籠	中世	
12	诹訪井城跡	诹訪井字岩ノ入	中世	
13	大沢城跡	小千谷字古城	中世	
14	武石城跡	武石字外の沢	中世	
15	鳥屋城跡	七日町字城ノ沢	中世	
16	桐沢城跡	桐沢字古城	中世	
17	原城跡	原字体ノ八	中世	
18	吉野島	吉野島字川向	中世	
19	御館	千谷沢字鷺之島	平安・中世	昭和59年、平成14・15年発掘調査
20	大塔塚	吉野島		
21	Iの原	森光字上の原	縄文	
22	坊屋敷	原字坊屋敷	縄文中期	
23	上の平	吉野島字上の平	縄文	
24	坊屋敷古戦山土地	原字坊屋敷	中世	資料館所蔵
25	上居平	七日町字上居平	縄文	
26	大官免	桐沢字大官免	縄文	
27	岩平	上村字岩平	縄文	
28	平原	鶴之鳥字平原	縄文	
29	押切	押切字万日平	縄文	
30	袋の原	原字袋の原	縄文	
31	西巻	上岩田字上の原	古代	
32	桜ヶ岡	原字桜ヶ岡	平安	資料館所蔵
33	刈干山	小栗山字源明	縄文	
34	七日町五輪塔	七日町字下居平	中世	3基
35	ハバムキ	七日町字下居平	縄文	
36	武石じゅのげ	武石字外の沢	縄文	
37	上ノ原B	相野原字上ノ原	縄文	
38	上小屋	横沢字上小屋	縄文	
39	堂平	新町字堂平	縄文	
40	Iの山	新町字入鳥場	縄文	
41	野田	太郎丸字油田	縄文	
42	宮原	諏訪井字クネガラミ	縄文	
43	乙の平	原字細田・平	縄文	
44	五日平	太郎丸字五日平	縄文	
45	厚刈	吉野島字厚刈	縄文	
46	上村城	横沢字岩手	中世	
47	箕輪城	横沢字箕輪	中世	
48	白清水城	横沢字大金沢	中世	
49	城	法板字北平	中世	
50	法坂城	法坂字南沢	中世	
51	猿橋城	小栗山字龍ノ入	中世	
52	延命寺城	小国沢字延命寺	中世	
53	小栗山城	小栗山字殿入	中世	
54	小国城	太郎丸字上ノ山	中世	
55	法末城	法末字沢中	中世	
56	諏明城	小栗山字源明	中世	
57	崩沢城	太郎丸字前沢	中世	
58	増沢城	原字水沢	中世	
59	三橋城	大貫舟ヶ島	中世	
60	野田東	太郎丸字野田	平安	
61	浦田	太郎丸字浦田	縄文・平安・近世	平成9年発掘調査
62	築先	七日町字築先	平安・中世	平成15年発掘調査
63	水上	新町字水上	弥生・平安・中世	木報告
64	上段	相野原字上段	中世	平成15年試掘

ている。山城も多く築かれており、館跡と伝えられる場所もあるが、調査例が少ないため不明な点も多い。小国氏が支配していたと伝えられている12~13世紀については、今後の資料の増加を待たなければならぬ。

近世には村単位で領主の交替があり、桑名藩や長岡藩、上ノ山藩の支配下となったこともあったが、史料が少なく、詳細が明らかではないことも少なくない。近年の試掘調査によって平地部分の数箇所で近世陶磁器が確認できている。

第三章 調査の概要

1 グリッド・調査区の設定（第3図）

調査区を網羅できるように真北に合わせて10mの方眼でグリッドを設定し、これを大グリッドとした。大グリッドは西から東にかけて算用数字の1~25、南から北にかけてアルファベットのA~Z'・Z''~T'とした。両者の組み合わせで「8 D」・「9 F」などと示した。大グリッド内には2m方眼の小グリッドを設け、北東隅を1、南西隅を25とした。大グリッドとの組み合わせにより「8 D13」「9 F11」などと示した。

なお、調査区は便宜的に北からA~D区に分け、D区からA区へと調査を進めた。

2 基本層序

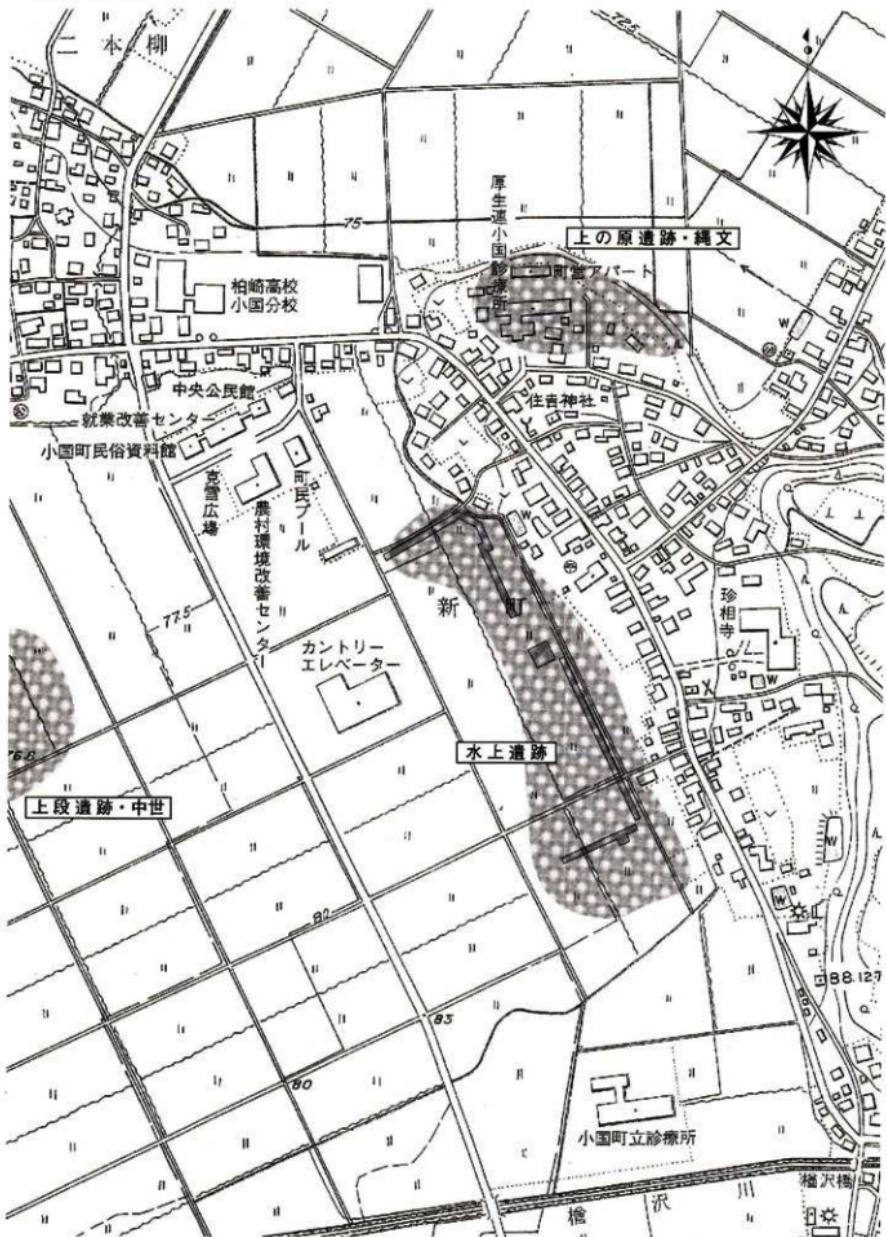
調査範囲は南北に細長く、直線距離で約320mにおよぶ。包含層は連続しておらず、途切れる地点もあった。地山（造構確認面）はD区とC区南側では灰色土・灰色粘土であり、C区北側からA区にかけては褐色土であった。いずれの地点も造構確認面は地山上面である。地区ごとに概観する。

A区北側は耕作土の下に黒褐色上数cm程度の包含層があるが、途切れる箇所もあり、わずかに平安時代・中世の遺物が出土した。9 T付近には旧河川と思われる幅3m以上、深さ2m以上の深い落ち込みが存在する。10W'付近では中世の包含層が薄く堆積する。12Y付近から南にかけては弥生時代の包含層があり、B区へとつながっている。

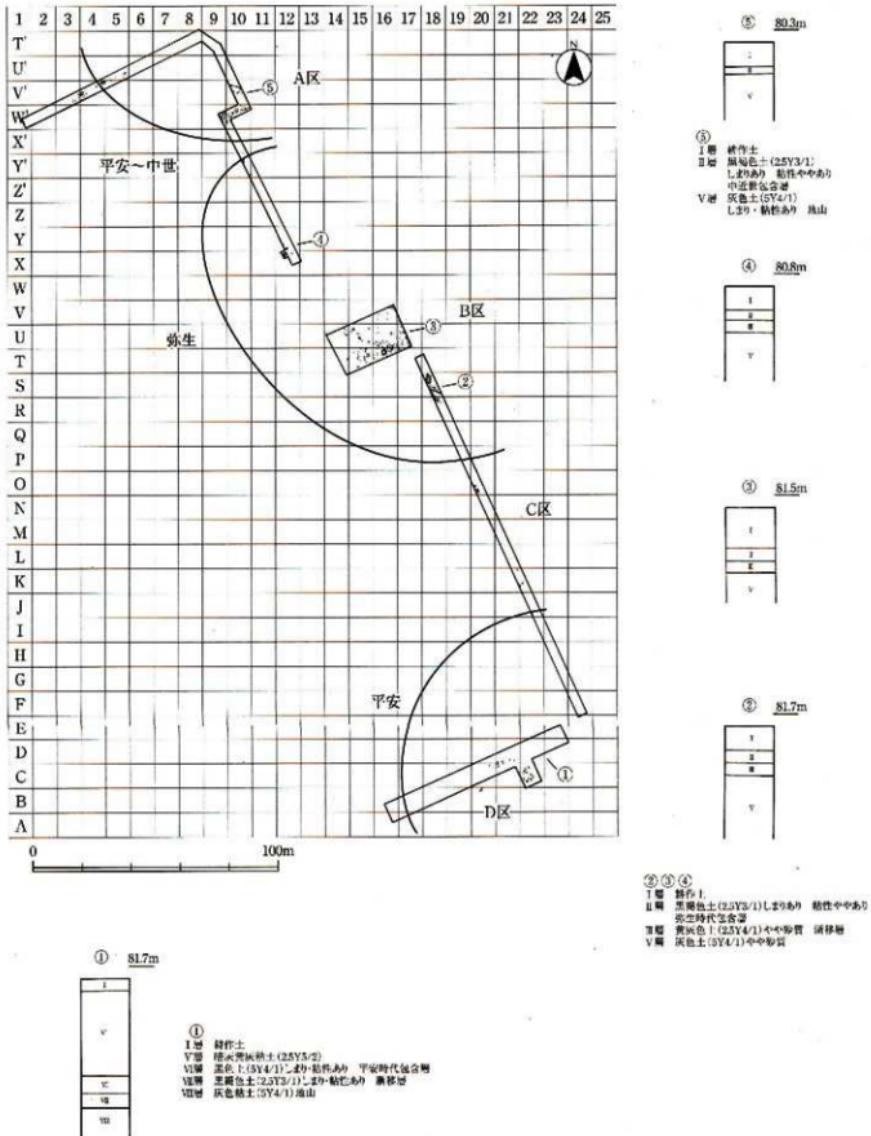
B区は弥生時代包含層（II層）が耕作土直下にある。上面が平らに削られた部分が多く、昭和30年代の耕地整理の際に一部削平されたと推定される。平安・中世の遺物も若干混入している。

C区は19P付近まではB区から連続する弥生時代包含層（II層）が認められる。22K付近では平安時代の包含層が地表面から40cmほどの位置に存在する。

D区は地表面から60~80cm下に平安時代の包含層（VI層）がある。南側の調整池部分の試掘調査でも同様の包含層があり、平安時代の遺物が多く出土している。厚い粘土層の下であり、水はけのよくない地盤であることからも、南側のやや高い地点に集落の中心があり、土器はそこから流れ込んだ可能性も考えられる。D区に厚く堆積する粘土層からみて、渋海川、あるいは支流である橘沢川が氾濫した時期があったと考えられる。



第2図 調査位置図 (1:5,000)



第3図 グリッド配置図・基本層序

第IV章 遺構

1. 概観

遺構が多く検出されたのは、A区10W'付近、A区12X・10Y'付近、B区、C区18T付近、D区22C付近の5地点である。主的に出土した土器の時期で①A区10W'付近（古代・中世）、②A区12X・10Y'付近、B区、C区18T付近（弥生時代）、③D区22C付近（平安時代）の3地点に区分できる（第3図）。

①A区10W'付近は主に土坑、井戸、柱穴がある。②A区12X付近とB地区、C地区18T付近は弥生時代の土坑と柱穴がある。③D地区は平安時代の遺物が出土し、遺構は柱穴になるかどうか不明な小規模な落ち込みを数基確認した。

2. 記述の方法

上記の3地点に分けて記述を行なう。土坑をSK、井戸をSE、柱穴をP、不明遺構をSXと記号化した。なお、上記の区分は長径が50cm以上のものを十坑とし、深さ50cm以上のもののうち、覆土の様相などから井戸を抽出した。遺構番号は種別に関係なく通し番号である。

3. 各説

①A区10W'付近

井戸2基、柱穴30基が検出されている。掘立柱建物を構成する柱穴もあるが、調査区外へ続くため全体は不明である。以前の耕地整理で削平された部分もあり、包含層は5cmに満たない。このため上器は遺構出土のものが大半で、包含層出土は少ない。遺構は出土土器から中世に属すると考える。

(1) 井戸（図版1 写真図版3・7）

S E65 深さは50cmに満たないが、S E67と形状や覆土が類似していることから井戸と判断した。覆土は黒褐色土が大半を占め、底面から漆器が2点と自然木、こぶし大の石が1点出土している。

S E67 湿水のため完掘はできなかったが、地山混じりの黒褐色土が続き、確認面から深さ106cmで大形の漆器椀と墨書きのある木片が出土した。覆土中央部には須恵器破片が1点混入していた。

(2) 柱穴

P 66、P 58、P 61が柱間2mほどで並んでいる。調査区外に伸びて2×2間以上の掘立柱建物になると推測できる。

②A区12X・10Y'付近、B区、C区18T付近

土坑21基、柱穴21基が検出されている。柱穴は深さが20cm前後と浅いものが多い。B区で小規模な掘立柱建物が建つ可能性もあるが、調査時にも確認できず、復元は困難であった。包含層は10cm前後と浅く、一部は以前に掘削された部分もあったと考えられる。包含層出土土器の人半を弥生土器が占めており、遺構も当該期のものと考える。遺物が出土した遺構を中心に記述する。

(1) 土坑

- SK 3 C区北東隅にあり、浅く、黒褐色土の覆土である。出土遺物はないが、周辺に弥生時代の土器が多く出土している。
- SK 4 SK 3 の西に位置し、黒褐色土の覆土である。
- SK 5 SK 4 の北にあり、調査区外に続くと思われる。覆土からは弥生土器の破片が出土した。
- SK 6 SK 6 北側にある落ち込み内で確認できたものである。落ち込みの土に比してより濃い黒色土が堆積しており、弥生土器が1点出土している。
- SK 51 A区南隅に位置する。浅い落ち込み状で、覆土からは弥生土器が数点、無斑晶質安山岩の剥片が3点出土した。
- SK 56 A区中央に位置し、黒褐色土の覆土中から弥生土器の破片が数点出土した。

(2) その他

C区北隅のSK 6 北側の落ち込みに沿うように、弧状の杭列が検出された。杭は上部が腐食していたが、耕作上から打ち込まれたものと判断し、近現代の水田・水路に伴うものと考える。杭周辺からの出土遺物はない。

(3) D区22C付近

規格の小さい柱穴が25基ある。いずれも浅く、掘立柱建物を構成するかどうか不明である。観察表にデータを記載した。包含層からは平安時代の土器が多く出土している。

第V章 遺物

1. 概 観

コンテナ（サイズ：34×54×15cm）で計8箱の遺物が出土した。弥生時代が3箱、平安時代が4箱、中世以降が1箱である。遺構が集中していた地点での包含層出土が多く、遺構に伴うものは少ない。調査区が狭く細長いことからも接合例は少ない。弥生時代、中世については可能な限り図化したが、平安時代については残存度の高いを中心とした。

2. 記述の方法

出土遺物は土器、土製品、石器、石製品、陶磁器、木製品がある。それぞれ遺構出土、包含層出土に区分し、種類・器種ごとに掲載した。出土点数が少ないため細分類は行わず、特徴を記した。破片資料は細別時期の特定が困難なものが多い。

3. 各 説

(1) 土器（図版8・9 写真図版8）

A. 遺構出土土器（図版8-1～7）

1) 十坑出土

S K21 1は土師器碗の底部である。S K21は深さ15cmほどの浅い土坑で、覆土は単層で一度に埋められた可能性もあり、土器も混入したものかもしれない。

S K7 2は弥生土器である。壺の頸部で、突帯は内面から押し出して作られたものと観察できる。突帯部分に縄文が施される。胎土は赤みがかった肌色で、栗林式に特徴的なものである。

S K51 3は壺で、受け口状の口縁部である。受け口部に櫛描連續刺突があり、小さいこぶはつまみ出しにより作出されている。幅の狭い端部に刻みが施されている。胎土は砂粒を含み、色が黄褐色を呈する北陸系である。4、5は壺の胴部である。4は5に比して粗いハケ目が施されている。5は同一個体と思われる破片が数点出土したが、これ以上接合しなかった。

2) 柱穴出土

P 56 6は弥生土器底部で、胴部に縦方向のハケ目が施される。色は黒褐色を呈する。

3) 井戸出土

S E67 7は平安時代の須恵器破片で、外面には平行叩き目が、内面は格子目文が残る。

B. 包含層出土土器（図版8-8～図版9-68 写真図版8）

以下では時代ごとに記す。

1) 弥生時代中期の土器（8～36）

中期後半の土器が出土しており、北陸系（小松式）と中部高地系（栗林式）に区分できる。両者は文様パターンや胎土により判断した¹⁾。胎土は砂粒を含み、色が黄褐色～褐色を呈するものを北陸系とし、細かい砂粒を含んで、色が黒褐色または赤褐色を呈するものを中部高地系と判断した。破片資料が多いため、器種や細別時期が明確にできないものもあるが、器種は甕、壺、鉢が存在する。以下にそれぞれの特徴を記すが、文様の呼称は、北陸系については『平田遺跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集』、栗林系については『松原遺跡 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36』を参考にした。文様が目立つ栗林式土器の岡化が多くなったが、北陸系は少ないわけではなく、ハケ目の施された壺の胴部破片や無文の破片は多く出土している。口縁部計測などによる比較は行っていないが、重量では北陸系2634.3g、中部高地系1895.9gとほぼ6:4の割合である。

a. 甕（8～27）

8は外面に横ハケ、内面に斜ハケ目が残る。9は櫛描波状文である。11は櫛描簾状文が描かれ、その上は欠けているが波状文と推測される。12は小さい破片だが櫛描連續刺突文が確認できる。13も櫛描による直線文である。14も櫛描波状文であるが、他に比べて施文はやや浅い。

16は胴部上半を3/4以上欠くが、唯一口縁から底部まで器形が把握できる資料である。施文は全体的にやや雜である。胴部上半の綫沈線による区画は等間隔ではなく、4または5単位と推測できる。綫沈線間に棒状工具による連續刺突が3列あるが、これも數や幅が安定していない。胴部下半は縦方向にミガキが施されるが、胎土がやや粗いため光沢を呈するほどではない。外面には炭化物が多く付着している。

17と18は同一個体で胴部の中央に列点があり、その下部に条痕が施されている。19は磨耗しているが、17・18と同様の文様構成である。列点があり、その下に条痕がある。17・18より条痕は細い。20はやや太

¹⁾ 北陸系の文様をもつが、胎土は栗林式と同じようなものもあり、判断しかねるものもあったため、両者の区別は厳密ではない。

い条痕で、下部が羽状になるかどうかは不明である。口縁端部はやや厚く、縄文が施される。21は緩い波状の櫛描文、直線文が施される。22は21と同一個体の下半部で斜め方向に太い条線がラフに描かれる。23は櫛描直線文で縦に区切り、その間に横方向の櫛描波状文が施されている。口縁端部は縄文が施される。外面に炭化物が多く付着しており、全体的に黒色を呈する。内面には横方向のミガキが認められる。

胎土は8・9は北陸系、10~23は中部高地系である。底部は24・25・27が北陸系で26が中部高地系である。26は底面にミガキ痕があるが、他は磨耗しており、調整は明らかではない。

b. 壺 (28~35)

全体の形が分かる資料はないが、頸部が細く、下半にむかって緩やかに広がる胸部をもつものが主体と考える。28は口縁内面と口縁端部外面に櫛描綾文が施されている。30は幅の狭い口縁端部に縄文が施されている。31・34・35は沈線による横帶文が施されるもので、35は垂下文があり、地文が縄文である。34の沈線間も縄文が施されている。32は壺の下半で沈線による波状文である。胎土は28・29が北陸系、30~35は中部高地系である。

c. 鉢 (36)

36は栗林式土器の鉢で、沈線による連弧文が描かれる。上位には平行沈線があると推測され、連弧文との間に縄文が施される。

2) 平安時代 (37~57)

土師器、内面黒色土器、須恵器がある。破片が多く、全形を把握できるものは少ない。

〈土師器〉無台椀、小甕がある。

土師器無台椀 (41~45) 底部はいずれも回転糸切りである。口縁部まで残存するものはないが、直線的に立ち上がるものと推測できる。41のように底部径がやや大きいものと、40・42~45のように小さいものがある。

黒色上器無台椀 (46) 内面にわずかにミガキが確認できる。

甕 (47~51) 口縁部・胸部破片が出土している。47は武藏型甕と呼ばれるもので、器壁が薄く頸部に段を有する。胎土は赤みがかった褐色である。48~50は口縁部が厚く、51のように上端がつまみ上げられたものもある。

〈須恵器〉 (37~40、52~57) 無台杯、有台杯、長頸瓶、横瓶、甕がある。

無台杯 (37~39) 37は胎上がり細かく、薄いつくりである。38は焼成不良のため軟質で白色を呈する。

39はロクロの回転方向が左回転であり、37・38とは胎上がり異なる。

有台杯 (40) ほぼ半らな底部に、端部が丸みを帯びた方形の高台が付されている。

横瓶 (52) 口縁部の破片である。色は白灰色を呈する。

長頸瓶 (53) 底部破片が1点ある。

甕 (54~57) いずれも胸部破片である。外面は平行叩き目 (55)、格子目文 (57)、平行線文にカキ目が加わるもの (54・56) がある。内面の痕跡には同心円文 (54 55 57) とハケ目 (56) がある。胎土は精良で器面は滑らかである。焼成はいずれも良好で硬質である。

これら平安時代の土器の時期については、須恵器の食膳具が少ないと、土師器椀・甕の形状から春日氏の編年 [春日2001] の8期に属するものが主体と考え、9世紀中葉～後葉に位置付けられると考える。なお、須恵器の37・38・57が佐渡小泊産である。

3) 中世(58~68)

〈珠洲焼〉(58~64) いずれも破片資料である。58は壺で口縁部が肥厚し、短く外反する。59~62は壺か盃の胸部である。63・64は片口鉢である。63は御目が認められない。64の御目は1単位6本で锐利である。ほとんど摩滅していない。63と64の底部外面はともに板目である。いずれも焼成は良好で硬質である。

〈中国陶磁器類〉(65~68) いずれも小破片である。65は青磁碗で、外面は無文で内面に文様をもつ。貫入があり、透明感がある。66の文様構成は不明だが、上部の文様は番文になるかもしれない。67・68は高台部で、67には釉が厚くかかる。色調は68のみが薄い褐色である。

これら中世の遺物の時期は珠洲焼壺(58)や片口鉢(64)がIV期〔吉岡1994〕で14世紀後半頃、片口鉢(63)がIII期で13世紀後半ごろに位置付けられる。青磁碗は65が13世紀代、68が14~15世紀ごろである。

(2) 土製品(69~70)

弥生土器を素材とした土器片円盤が2点出土している。69は櫛描波状文が施された壺の胸部片で、70は無文で胸部下半と思われる破片である。2点とも側面に磨痕があり、両側から穿孔されている。

(3) 木製品(71~74)

木製品は遺構から漆器が3点、墨書のある木片が1点出土している。他には時期を明確にできない柱材と杭が数点あり、これらはすべて樹種同定をおこなった(第VII章参照)。

1. 遺構出土

S E 65 71・72はともに計10cmに満たない黒色漆器皿である。2点ともロクロ爪跡がわずかに残っている。形態から13世紀代のものと考える。樹種はともにケヤキである。

S E 67 73は径22cmの大形の黒色漆器椀である。新潟県内に同様の大きさの類例はないが、形態から13世紀ごろと考える。内面に黒漆痕があるが、外面はほとんどはがれている。高台部分と底面にもわずかに漆痕がある。樹種はハコヤナギ属と鑑定されている。

74は3.6×6.1cmの薄く小さい板の両面に、墨で絵が描かれた札のようなものである。材質はスギで、木目が明瞭に観察できる。裏表ともに墨痕の薄いところがあり、赤外線写真撮影を行っても明瞭にならなかつたが、表面には觀音様らしさのと、背後には光背のような放射状の線が見える。裏面は着物を着た人物のようである。類例を調べきれなかったが、井戸の底から出土したことからもお守り札のようなので、マツリにかかる物と推定できる。時期は共伴した漆器(73)から13世紀ごろと考える。

(4) 石器・石製品(75~76)

石製品では硯が1点、大型石庖丁が1点である。ほかには無斑晶質安山岩の剥片が33点、頁岩の剥片が5点あり、重量は合計912.5kg出土している。剥片が出土した地点は弥生土器が分布する範囲とほぼ一致している。

75の硯は、D地区の平安時代包含層直上の粘土層からの出土である。周辺からの流れ込みである可能性がある。長さ8cm、幅4.4cm、厚さ1.1cmの黒色粘板岩製で、表面は使用により摩滅している。裏面に新たな硯面が彫りこまれ、再利用されている。側面には「青斎」の文字が刻まれている。斎は柳の異体字と考えられ、青柳という姓を記したものである。遺跡に隣接する新町集落は、寺の建立が慶長4年(1599)と伝えられることからその前には存在していたと思われる。この硯は近世に属すると考える。

周辺の試掘・確認調査では16世紀末~17世紀前半にかけての陶磁器類が出土しており、近世集落が現在

の集落より西側にあった可能性もある。

大型石庖丁は、ほぼ完形品である。半月形を呈し、直線部分が刃部で両刃である。長さが24cm、幅12.7cm、厚さ1.4cm、重さ646gである。材質は粘板岩製で、全体的にうすい灰色で、まだらに白っぽい縞状の線が入る。孔は両側穿孔で紐ずれ等の痕跡は、肉眼では観察できない。裏面は刃部から約4cmのところに幅1~2mm、深さ1~2mmの沈線が入る。この沈線は太いものは一条であるが、その下部にも3本ほど浅い線が入っている。成形の研磨は全面に及ぶが、筋理面ではがれた部分はくぼんでいるため研磨痕は見られない。刃部は両面とも丁寧に研磨されて作り出されているが、背部には粗い剥離痕が残る。刃面に見られる光沢については、使用痕分析を行っており、イネ科植物を刈った可能性が高い（第VI章参照）。

（5）その他

古錢が3点出土している。寛永通宝が1点、判読できないものが1点、元祐通宝が1点（77）である。77はC区で出土している。

第VI章 水上遺跡大型磨製石庖丁の使用痕分析

沢田 敦

水上遺跡から出土した大型磨製石包丁について使用痕分析を行い、その機能を推定した。

分析方法

分析方法はいわゆる高倍率法の使用痕分析である。高倍率法とは1970年代後半にL. H. キーリーによって開発され (Keeley 1980)、主に100倍以上の倍率で石器に残された使用光沢面を顕微鏡観察する方法である。使用痕からは使用実験にもとづいて石器の運動方向や使用対象物が推定される。

ここでは、オリンパス製の落射照明金属顕微鏡を使用して観察を行った。使用した倍率は100倍と200倍である。資料の観察にあたっては、エタノールによる手脂の拭き取り以外の前処理は行わなかった。観察された使用光沢面のタイプ分類は梶原らによる頁岩製石器における実験に基づいている (梶原・阿子島 1980)。あわせて、使用光沢面の強度分布図を作成した (第4図)。光沢面の強度はR. グレースによる光沢面の発達度分類による発達度A (光沢面のバッチが点在するもの)、A+ (バッチが発達し、数も増加するが、お互いに連結していないもの) を弱、B (バッチが連結したもの) を中、B+ (連結した単位が発達し、単位同士がさらに連結したもの) を強とした (Grace 1989)。

結果

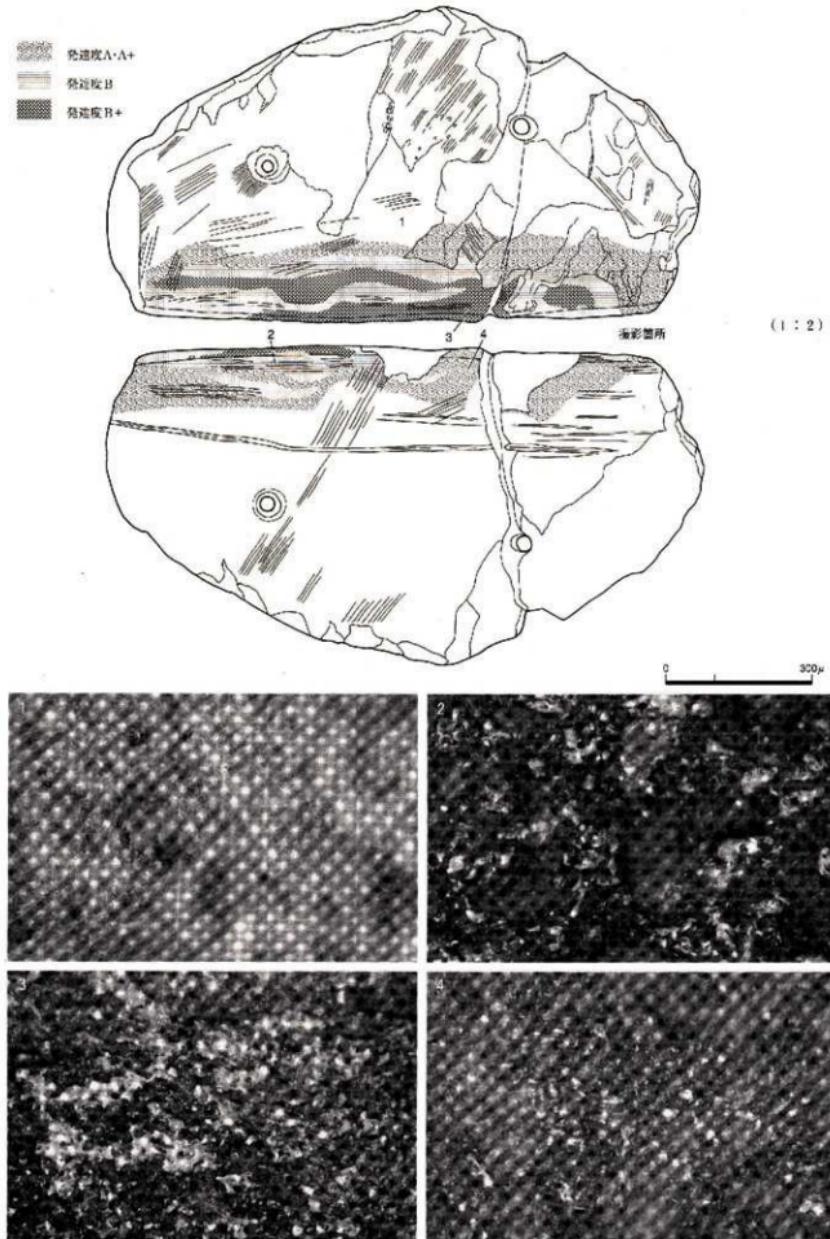
観察の結果、刃部縁辺を中心に使用光沢面が広範囲に確認できた。光沢面の分布範囲は刃部縁辺付近のほぼ全域にわたり、最大で刃縁から約4cm内側まで分布していた。光沢面は刃部縁辺の中央付近でもっとも強く、発達度B+で、最大発達部位では視野のかなりの範囲が使用光沢面に覆われていた。光沢面は、縁辺から離れるほど弱くなり、光沢面の強さの変化は漸移的である。

光沢面は断面形が丸く、しばしばドーム状を呈しており、石器表面の凹凸の低部への進入度も高かった。また、刃部の摩耗度も高く、刃部断面形は丸みを帯びていた。表面はなめらかで、刃縁と平行する線状痕が観察できた。線状痕は微細ないわゆる埋められたタイプと明瞭で微細な溝状のものの両者が認められた。また、彗星状のくぼみも確認できた。光沢面と未変化の石器表面との境界は明瞭かつコントラストが強かった。

これらの特徴から、観察された使用光沢面はAタイプと考えられる。光沢面の個々のバッチや単位を観察した場合、AタイプとBタイプは非常によく似ているが、光沢面がわざわざ広範囲に分布することや最大発達部位の状況からAタイプであると判断した。Aタイプは穀科植物を使用対象物とした場合に生じることが多い。また、線状痕が刃部縁辺と平行し、光沢面の分布範囲が刃部縁辺のほぼ全域で石器の表裏で対称的なことから、石器は刃部と平行に動かされて使用されたと推定できる。光沢面が刃部から約4cm内側まで分布していることから、対象物はかなりボリュームがあったのだろう。以上の結果から、この石器は、稲株や稻わらなどの切断に使用されたものと推定可能である。

引用文献

- 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—」(東北大学使用痕研究チームによる研究報告 その2) 考古学雑誌第87巻第1号 1-36頁
 Keeley, L. H. 1980 Experimental Determination of Stone Tool Uses. University of Chicago Press.
 Grace, R. 1989 Interpreting Stone Tool Function The Quantification and Computerisation of microwear analysis. BAR International Series 474.



第4図 石砲丁 使用痕光沢強度分布図・顕微鏡写真

第VII章 水上遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社 吉田生物研究所

1. 試 料

試料は小国町水上遺跡から出土した漆器 3 点、墨書き木片 1 点、柱・杭材 7 点の合計 11 点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結 果

樹種同定結果（針葉樹 1 種、広葉樹 4 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

（遺物 No. 4 : 本報告番号 74 : 墨書き木片）（写真 No. 4）

木口では仮道管を持ち、早材から晚材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晚材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1 ~ 3 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヤナギ科ハコヤナギ属 (*Populus* sp.)

（遺物 No. 1 : 本報告番号 73 : 漆器）（写真 No. 1）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（~100 μm）が単独または 2 ~ 4 個放射方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顯著。柾目では道管は單穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、節状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ~450 μm であった。ハコヤナギ属はヤマナラシ、ドロノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

3) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

（遺物 No. 2 B : 報告外、SK65から漆器とともに出土した自然木）（写真 No. 2 B）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（~110 μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2 ~ 3 列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2 ~ 3 列、広放射組織の 3 種類がある。広放射組織は肉眼でも 1 ~ 3 mm の高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

4) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物No. 5~11: 報告外、C区の杭列、Pit90の柱痕) (写真No. 5~11)

環孔材である。木口では円形ないし梢円形で大体単独の大道管 (~500 μm) が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。板目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の單列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり (strand)、軸方向要素の大部分を占める木纖維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

5) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(遺物No. 2 A、3: 本報告番号71、72: 漆器) (写真No. 2 A、3)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管 (~270 μm) が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集團管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している (イニシアル柔組織)。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。板目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少數の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ

同じ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べて大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

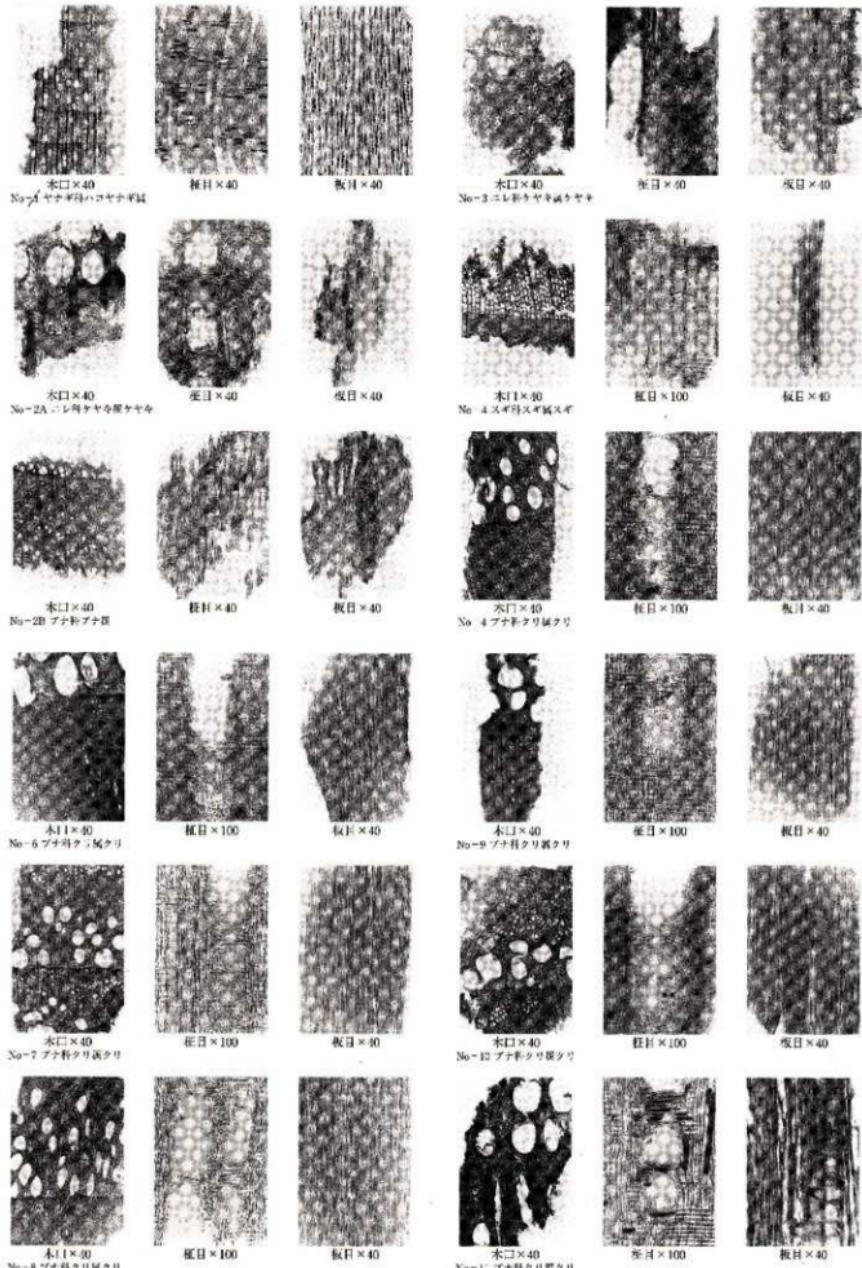
小国町水上遺跡出土木製品同定一覧表

資料No.	出土位置・遺構	報告No.	種類	樹種
1	S E 6 7	7 3	漆器	ヤナギ科ハコヤナギ属
2 A	S E 6 5	7 1	漆器	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
2 B	S E 6 5		自然木	ブナ属ブナ科
3	S E 6 5	7 2	漆器	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
4	S E 6 7	7 4	墨書き木片	スギ科スギ属スギ
5~10	C区杭列		杭	ブナ科クリ属クリ
11	P 9 0	.	柱痕	ブナ科クリ属クリ

<参考文献>

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 (1998)
 島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社 (1982)
 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」京都大学木質科学研究所 (1999)
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社 (1979)
 深澤和三「樹木の解剖」海青社 (1997)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆ N i k o n M I C R O F L E X U F X - D X T Y P e 115



第Ⅷ章 まとめ

1. 弥生土器

小国町ではこれまで弥生時代の遺跡は確認されておらず、本遺跡が初例となる。時期は中期後半である。中部高地系の栗林式土器は、北信地方で成立したが、その成立のしかたについて等では見解が統一されていない状況である。一方で細分については栗林I式、II式に大別し、I式を古・新段階に細分する編年〔笠澤1996〕が広く用いられている。

分布は主に千曲川水系に広がり、信濃川から県内に入っている。上越・中越には大量に入りこんでおり、上越市吹上遺跡では上越地方の様相を明らかにできる良好な遺構一括資料がある〔笠澤他2002〕。

北陸系小松式土器と共に伴する例が知られ、下越地方でも數例確認されているが、県北部の村上市砂山遺跡は両者が共に出土する限界の資料である〔滝沢・野田2003〕。こうした土器の分布は、それぞれの文化が及ぼす影響力の強さを示している。

本遺跡の資料は甕の16~20などが栗林I式古段階にあたり、成立期の土器である。II式の甕は23などが挙げられるにすぎない。壺は破片のみであるが、多くはI式古段階~II式に属すると考えられ、36の鉢はII式と推測できる。北陸系では3や28が新潟県内の中期後半二期〔田中・丸山1999〕にあたる。全体的には国史跡の柏崎市下谷地遺跡〔高橋ほか1979〕出土資料とほぼ同時期といえる。

同時期ごろにおける周辺地域をみると、前掲の下谷地遺跡では土器のほかに石器、木製品が多く出土している。土器は北陸系を主体としており、中部高地系栗林式が定量認められる。長岡市横山遺跡も北陸系を主体に東北、中部高地系が若干認められる。それに対し、十日町市では中部高地系土器が主体となっている。

中越地域においては、信濃川水系の山間部と海岸平野部で分布する土器の系統が異なるとされている〔滝澤2003〕。栗林式土器は信濃川流域に伝播しながら柏崎平野へ波及したと推測されており〔甘粕1999〕、小国町水上遺跡はその流れの中間地点にあり、土器のあり方が注目される。文様が日立ため栗林式土器の図化が多くなったが、前述のように胎土で区分した場合の重量では北陸系：中部高地系がほぼ6:4である。調査面積が狭く、出土量も少ないため個体数計測や器種ごとの比率は出していないが、重量による比率は中間地点のありかたをよく示している。

2. 大型石庖丁

石庖丁は南九州から東北中北部まで分布することが知られ、使用痕分析からも穂摘み具としての用途が考えられている。本遺跡のような大型のものは、大型石庖丁として分類されてきた〔平井1991〕。長さ20cm前後、幅10cm前後のものを指しており、打製のもの、定型的でないものも多いことが知られる。

分布は石庖丁とほぼ重なっており、形態が類似するものもあるが、大きさ・重さからその用途には疑問もあった。その後収穫具である石庖丁とは区別し、大型直線刃石器として分類した研究がある〔斎野1993・1994〕。実験使用痕分析から、収穫後のわらの刈り取りや除草など植物切断具としての用途が考えられている。〔斎野2002〕。本遺跡のような石庖丁と相似形のものは、石川県小松市八日市地方遺跡〔小松市教委2003〕などで知られ、北陸に地点的に分布している。しかし事例が少ないとから、広く分布したものかどうかは明確ではない。

時期は出土土器から弥生時代中期後半と考える。新潟県は石庖丁を含め大陸系磨製石器の希薄な地域で

あり、弥生時代の水田が検出された例も少なく、古墳時代前期まで時期を広げても刈羽郡刈羽村西谷遺跡、三島郡和島村人武遺跡で水田跡が確認されているにすぎない〔春日1999〕。しかし、稻作が行われていたことは確実と考えられ、今回小国町で石庖丁が見つかったことは、中越地域山間部においても農耕文化が広がっていた根拠となろう。

3. 遺跡の立地

本遺跡は平成14・15年の試掘・確認調査の結果、おおよその範囲が確認できている。標高70m前後の低位段丘上であり、渋海川の氾濫を受けたとも言われていた場所である。今回の発見により、小国町の低地部分の利用が從来考えられてきたよりもかなり古いことがわかった。平安時代、中世、近世の遺物も出土しており、氾濫原と言われていた低地においても水量が減った時期には集落の利用があったのであろう。

今後も同様の低地部分において県営ほ場整備の計画が数ヶ所あるが、試掘調査の方法にも再考を要する。

引用・参考文献

- 青木一男 2000「第2章 第2節 栗林土器」「松原遺跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
- 甘粕 健 1999「第1節 総論 1 新潟県の弥生時代」「新潟県の考古学」新潟県考古学会
- 小国町教育委員会 1985『御館 発掘調査報告』
- 小国町教育委員会 2003『浦田遺跡発掘調査報告書』小国町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 小国町教育委員会 2003『御館遺跡II』小国町埋蔵文化財調査報告書第4集
- 小国町 1976『小国町史 本文編』
- 柏崎市 1990『柏崎市史 上巻』
- 春口真実 1999「第4節生産 第1項水稻農耕」「新潟県の考古学」新潟県考古学会
- 春口真実 2001「第VI章まとめ」「梯子谷窯跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡I』石川県小松市教育委員会
- 斎野裕彦 1993・1994「弥生時代の大型直縁刃石器（上・下）」「弥生文化博物館研究報告』2、3
- 斎野裕彦 2002「農具－石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」「考古資料大観第9巻－弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器」「小学館
- 坂井秀弥 1999「第4章古代 第1節 総論」「新潟県の考古学」新潟県考古学会
- 坂上有記 2000「第V章 遺物 1. 土器」「平田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集
- 笹澤正史他 2002『吹上遺跡発掘調査概要報告書』新潟県上越市教育委員会
- 笹澤正史 2003「栗林式土器と小松式土器」「越境する土器－土器による空間分析－」中部弥生時代研究会第8回例会発表要旨集
- 笛沢 浩 1996「栗林式土器」「日本土器事典」雄山閣出版
- 高橋 保他 1979「下谷地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第19 新潟県教育委員会
- 流沢規朗・野田叡文 2003「2. 土器」について「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・瀧ノ前遺跡を中心に－」三面川流域の考古学 第2号 奥三面を考える会
- 田中 靖・丸山一昭 1999「第2節土器 第2項 弥生中期後半」
- 新潟県教育委員会 1984『今池遺跡・下新町遺跡・千安遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集

- 平井 勝 1991『弥生時代の石器』 ニューサイエンス社
水沢幸一 2001『下町・坊城遺跡V』中条町埋蔵文化財調査報告第21集
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

要 約

- 水上遺跡は新潟県刈羽郡小国町大字新町に所在する。
- 遺跡は小国町中央部の低位段丘上に位置する。標高は70m前後である。
- 調査は県営は場整備事業に伴う発掘調査で、調査範囲は、用水路部分と田面に掘削が及ぶ範囲の1879m²である。
- 調査は平成15年9～10月に行ない、報告書の作成を16年度に行なった。
- 遺跡からは弥生時代、平安時代、中世、近世の遺物が出土した。弥生時代の遺物が確認できたのは小国町では初めてである。
- 弥生時代の土器は中期後半の中部高地系栗林式と北陸系小松式がある。石器は県内でも類例の少ない石廬丁が出土し、使用痕の鑑定結果からも稻作が行われていた可能性を示している。
- 平安時代の土器は9世紀中葉～後葉頃で、破片は多く出土したが、接合例が乏しい。
- 中世陶磁器類は13世紀～15世紀頃、漆器は13世紀ごろで樹種同定の結果ケヤキとハコヤナギ属であることがわかった。
- 近世陶磁器類は報告外だが、16世紀末～18世紀後半のものが出土している。
- 遺構は弥生時代の柱穴・土坑、平安時代の柱穴、中世の掘立柱建物・井戸がある。
- 調査区が限られており、集落の全容は不明であるが、弥生時代の集落は調査区東側に、平安時代の集落は南側の微高地に広がっていたと推測できる。

遺構観察表

柱穴

() 内は推定値

種別	番号	山土位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)
Pit	15	17	U	18	54	34 36 80.69
Pit	16	17	U	18	29	18 27 80.81
Pit	18	17	U	23	30	24 27 80.78
Pit	19	17	U	24	54	34 33 80.74
Pit	23	16	U	3	42	36 30 80.61
Pit	25	16	V	4	39	28 39 80.60
Pit	29	16	U	18	43	34 17 80.71
Pit	30	16	U	24	47	35 20 80.67
Pit	31	16	U	13	36	28 16 80.71
Pit	35	16	T	11	48	28 36 80.71
Pit	36	15	T	16	34	26 22 80.51
Pit	37	15	T	17	46	35 19 80.74
Pit	38	16	U	10	31	24 20 80.74
Pit	41	16	V	13	41	40 45 80.33
Pit	54	10	Y	5	44	32 19 79.51
Pit	55	10	Y	5	51	40 36 79.35
Pit	59	10	W	17	20	18 20 79.69
Pit	60	10	W	17	36	28 48 79.42
Pit	61	10	W	17	36	28 48 79.42

種別	番号	出土位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)
Pit	64	10	W	12	34	25 27 79.64
Pit	70	9	W	3	39	24 41 79.46
Pit	77	3	V	5	48	42 35 79.25
Pit	102	22	C	1	52	38 20 82.21
Pit	103	22	C	12	34	32 22 82.18
Pit	104	22	C	12	38	22 27 82.14
Pit	105	22	C	6	30	24 11 82.31
Pit	106	22	C	1	24	22 12 82.30
Pit	107	22	D	10	40	28 19 82.16
Pit	108	22	D	10	30	26 21 82.14
Pit	109	22	D	15	38	24 13 82.18
Pit	110	22	C	11	34	22 15 82.15
Pit	111	21	D	3	32	28 14 82.15
Pit	112	21	D	3	36	24 22 82.06
Pit	113	21	D	8	36	32 17 82.16
Pit	114	21	D	13	42	32 14 82.17
Pit	115	21	D	19	38	24 14 82.14
Pit	116	21	D	24	38	30 16 82.13

土坑・井戸

種別	番号	出土位置			底面標高 (m)	出土 遺物	備 考
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)			
SK	3	18	S	15	140	106 34 80.75	
SK	4	18	S	15	112	66 38 80.79	
SK	5	18	S	14	56	40 13 80.92	
SK	6	18	S	19	173	63 28 80.79	弥生土器破片
SK	7	18	S	21	470	160 37 80.61	弥生上器破片
SK	22	16	U	9	78	46 40 80.50	弥生土器破片
SK	24	16	U	9	144	62 40 80.50	
SK	26	16	U	4	78	48 17 80.75	
SK	27	15	T	7	69	48 12 80.74	
SK	28	15	T	6	68	28 14 80.62	
SK	32	15	T	6	152	108 26 80.58	
SK	33	15	U	10	56	46 18 80.63	
SK	34	15	U	10	96	58 20 80.56	
SK	39	17	U	25	72	46 18 80.74	
SK	40	16	U	6	64	46 13 80.65	
SK	42	15	U	21	115	98 44 80.55	
SK	51	12	X	16	182	148 18 80.15	弥生土器 剥片
SK	53	10	Y	12	83	47 35 79.32	圖版 8-3~5
SK	56	10	Y	13	73	62 50 79.30	弥生土器破片
SK	62	10	W	13	54	42 26 79.63	圖版 8-6
SK	66	10	W	24	78	46 46 79.43	
SK	78	4	V	24	112	90 32 79.07	
SK	101	22	D	9	64	52 13 82.19	
SK	21	16	U	20	346	240 22 80.77	上師器
SE	65	10	W	7	112	86 52 79.36	漆器 自然木
SE	67	10	W	25	86	72 106 78.95	漆器 墨書き木札 須恵器破片
							圖版 9-71, 72 圖版 9-73, 74

土器観察表

() 内は推定値

報告番号	種別	器種	出 土 位 置			法 量	透 存	色 調	備 考
			大 グ	小 グ	透 構				
1	土師器	無台輪	16U	20	SK21		(5)	にぶい桜	
2	弥生土器	壺	18S	21	SK7			にぶい褐色	
3	弥生土器	壺	12X	16	SK51	(12.8)		にぶい黄桜	
4	弥生土器	壺	12X	16	SK51			にぶい黄桜	5よりやや粗いハケ目
5	弥生土器	壺	12X	16	SK51			にぶい黄桜	接合しない破片多い

報告号	種別	器種	出土位 置		法 品		遺存	色 調	備 考	
			大 グリッド	小 グリッド	遺 構	層 位	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	
6	弥生土器	甕	10Y	13	SK56			?		破片 にぶい黄橙
7	須恵器	甕	10W	25	SE67					破片 黄色
8	弥生土器	甕	10X	14						液黃橙
9	弥生土器	甕	16U	6	II					破片 にぶい黄橙
10	弥生土器	甕	16V	18	II					破片 黑褐色
11	弥生土器	甕	16V	18	II					破片 黑褐色
12	弥生土器	甕	18R	2	II					破片 黑褐色
13	弥生土器	甕	18R	13	II					破片 灰黄褐色
14	弥生土器	甕	16U	14	II					破片 にぶい黄橙
15	弥生土器	甕	18R	7	II					破片 にぶい黄橙
16	弥生土器	甕	18R	7	II	16.8	20.8	7	3/5	黒褐色
17	弥生土器	甕	16V	10	II					破片 にぶい黄橙
18	弥生土器	甕	16V	10	IV					18と同一個体
19	弥生土器	甕	16L	16	II					破片 紅褐色
20	弥生土器	甕	16V	20	II	13.6				破片 黑褐色
21	弥生土器	甕	18R	3	II					破片 22と同一個体
22	弥生土器	甕	18R	3	II					破片 黑褐色
23	弥生土器	甕	18R	2		Q6.2				破片 黑褐色
24	弥生土器	甕	16V	19	II			(5)		破片 にぶい黄橙
25	弥生土器	甕	16U	6	II			(7)		破片 にぶい黄橙
26	弥生土器	甕	18R	13	II			6		破片 にぶい黄橙
27	弥生土器	甕	16L	6	II			(7)		破片 黑褐色
28	弥生土器	甕	10Y	6	II					破片 淡黄橙
29	弥生土器	甕	16V	20	II					破片 淡黄橙
30	弥生土器	甕	BIX							破片 にぶい黄橙
31	弥生土器	甕	16V	18	II					破片 にぶい黄橙
32	弥生土器	甕	18R	2	II					破片 にぶい黄橙
33	弥生土器	甕	10X	14						破片 黑褐色
34	弥生土器	甕	16U	4	II					破片 にぶい黄橙
35	弥生土器	甕	16V	18	II					破片 にぶい黄橙
36	弥生土器	甕	16U	18	II					破片 黑褐色
37	須恵器	杯	23H	8	VI	(12.2)				破片 黄色
38	須恵器	杯	24F	18	VI	(12.5)	3.4	6.8		破片 淡白色
39	須恵器	杯	24F	7	VI			8		破片 淡色
40	須恵器	有台杯	23H	13	VI					破片 淡色
41	土師器	無台碗	24F		VI			7.2		破片 にぶい黄橙
42	土師器	無台碗	23F	13	VI			6.8		破片 にぶい黄橙
43	土師器	無台碗	16U	5	II			5.2		底部凹転糸引き
44	土師器	無台碗	24F	13	VI			5.4		破片 にぶい黄橙
45	土師器	無台碗	15T	13	II			5.2		破片 にぶい黄橙
46	黒色土器	無台碗	24F	13	VI			(5)		破片 にぶい黄橙
47	土師器	甕	4U	13	II					破片 にぶい褐色
48	土師器	甕	23H	20	VI	(30)				破片 にぶい黄橙
49	土師器	甕	22J	5	VI	(30)				破片 淡褐色
50	土師器	甕	23H	13	VI	(26)				破片 にぶい黄橙
51	土師器	甕	23H	8	VI	(25.6)				破片 にぶい黄橙
52	須恵器	横口瓶	21K	1	VI					破片 黄色
53	須恵器	長頸瓶	22J	23	VI			(12)		破片 淡色
54	須恵器	瓶	23E	15	VI					破片 淡色
55	須恵器	甕	22K	17	VI					外: 平行叩き カキ目
56	須恵器	甕	23J	25	VI					外: 平行叩き 内: 同心円
57	須恵器	甕	22J	4	VI					内: ハゲ目 外: 格子目 内: 同心円
58	珠洲焼	甕	16V	13	II					破片 底色
59	珠洲焼	甕	14U	8	II					破片 底色
60	珠洲焼	甕	15V	5	II					破片 底色
61	珠洲焼	甕	6L	8	II					破片 底色
62	珠洲焼	甕	6L	8	II					破片 底色
63	珠洲焼	片口鉢	2W	3	II					破片 底色
64	珠洲焼	片口鉢	15U	6	II					破片 底色
65	青磁	鉢	7W	5	II					破片 底色
66	青磁	鉢	BIX		I					底色
67	青磁	甕	9W	5	II					底色
68	吉田	甕	CIX							底色
71	漆器	皿	10W	7	SE65			8	2/3	ケヤキ 内外黒色漆
72	漆器	皿	10W	7	SE65	10	1.7	9	2/3	ケヤキ 内外黒色漆
73	漆器	甕	10W	25	SE67	最下	22	7	14	ハコヤナギ属 内外黒色漆

石器・土製品・木製品ほか

	出土位 置	遺構	層 位	長さ	幅	厚さ	備 考
69	土器片門甕		18B	13	II	4.5	0.55
70	土器片門甕		18R	13	II	3.7	0.6
74	墨書き木片		11W	25	SE67	最下	6.1
75	硯		DIX		V	4.4	1.1
76	人型石臼丁		16V	4	表土	24	12.7
77	元祐通宝		20N	3	VI		1.4
							初唐4-1086年 北宋

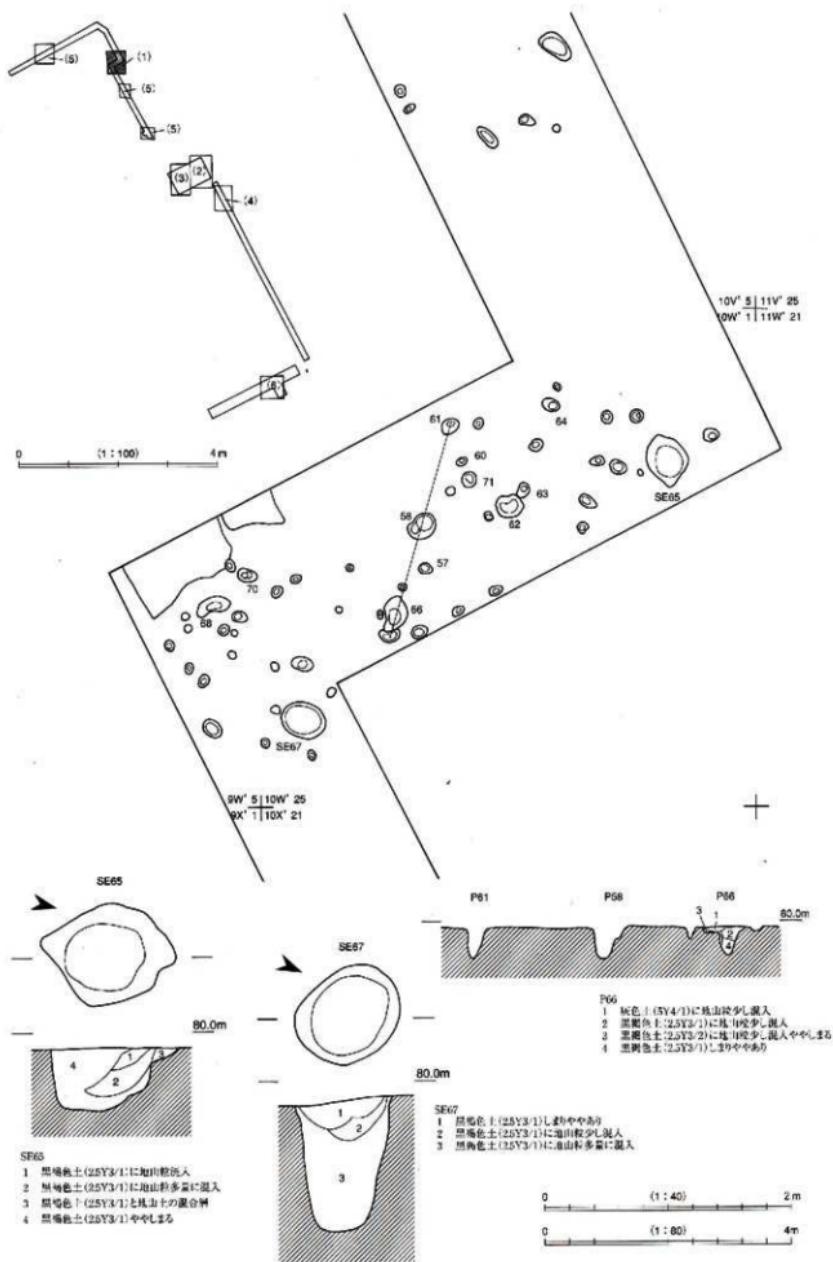
図 版

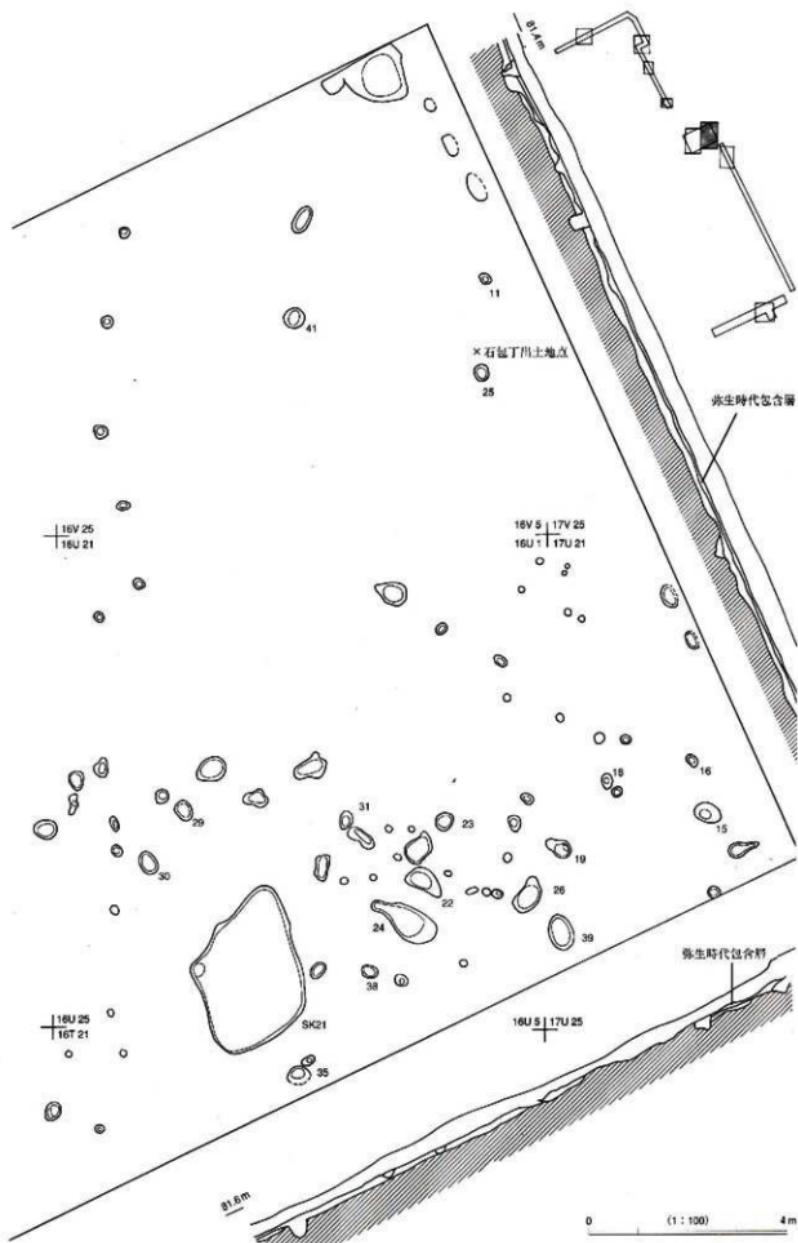
凡 例

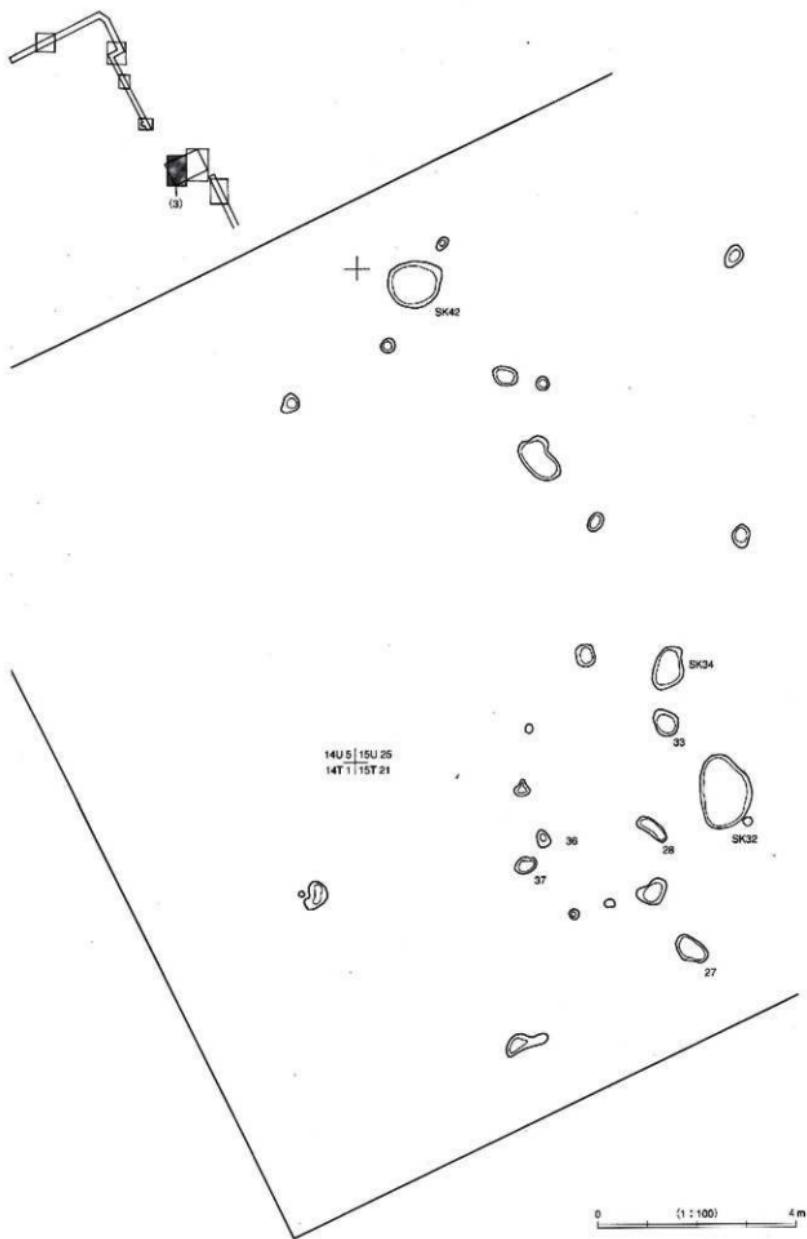
1. 這構分割図はすべて北を上にして掲載した。
2. 分割図の中で番号のみ記入したものはP(柱穴)である。
3. 土器は須恵器を断面塗りつぶし、土器は白抜きとした。

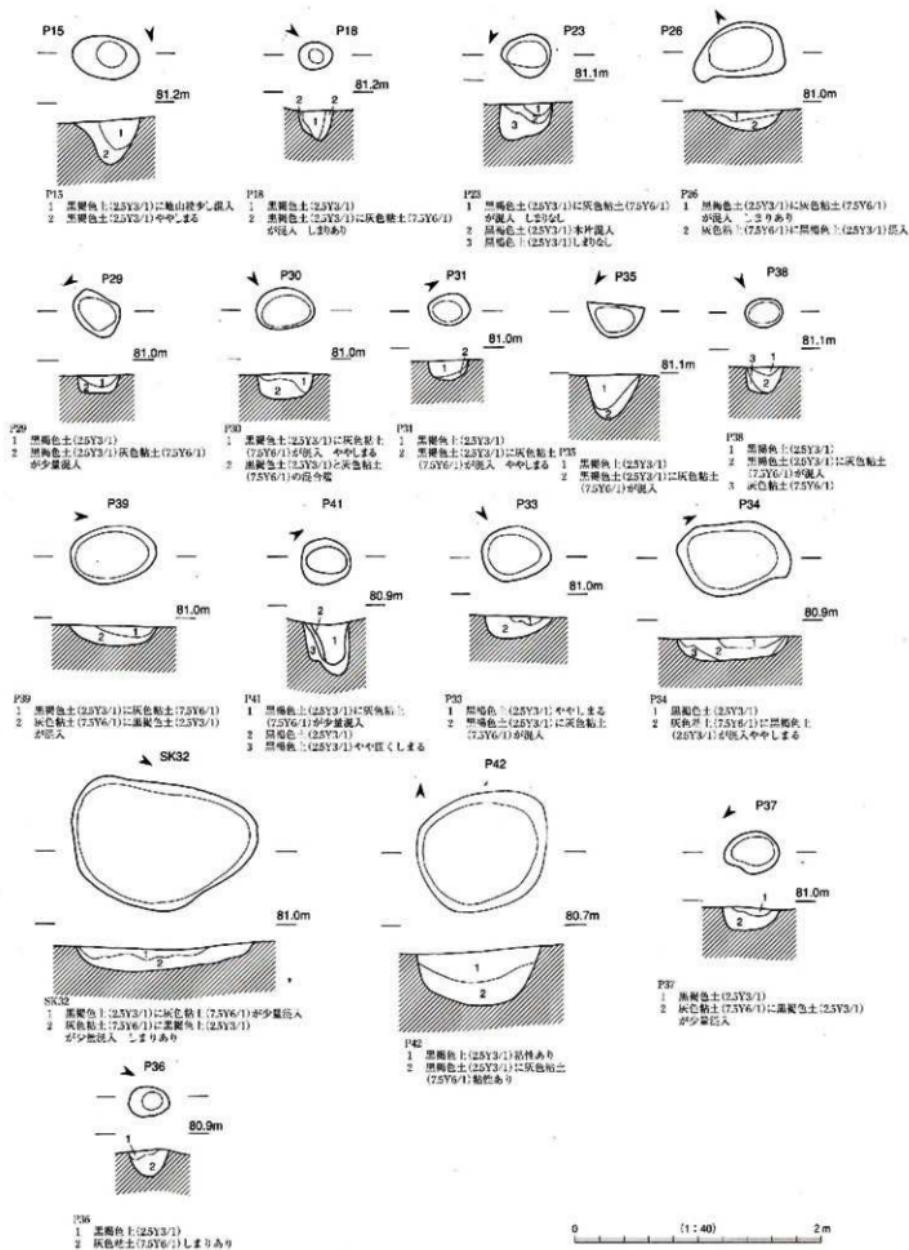
遺構分割図 (1) A区10W'付近

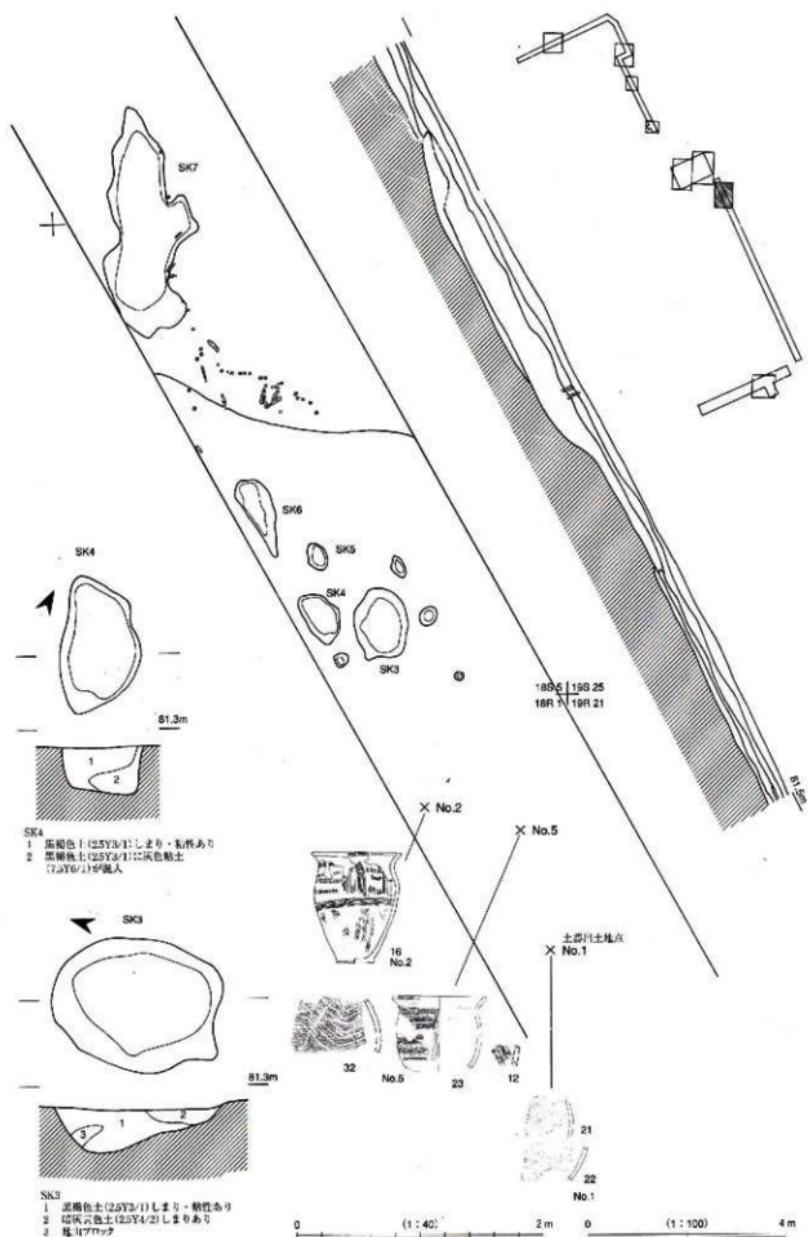
図版1





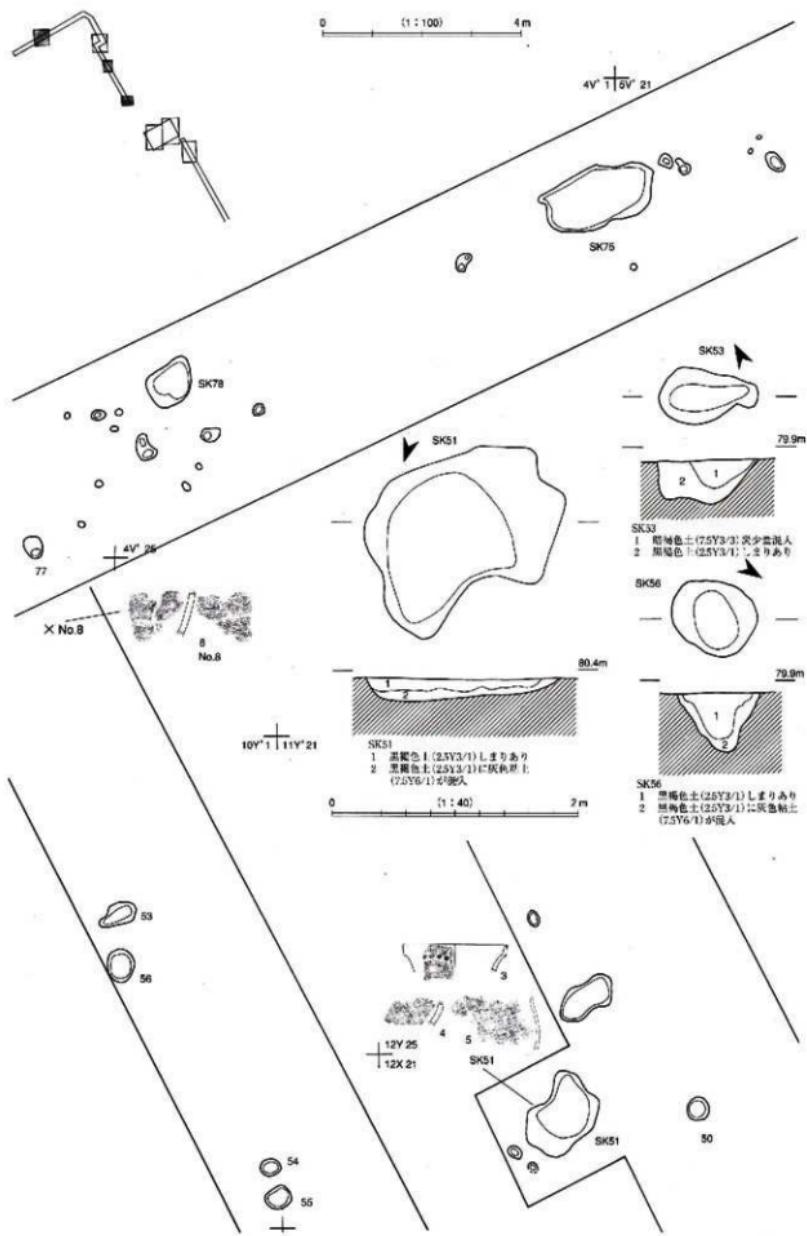






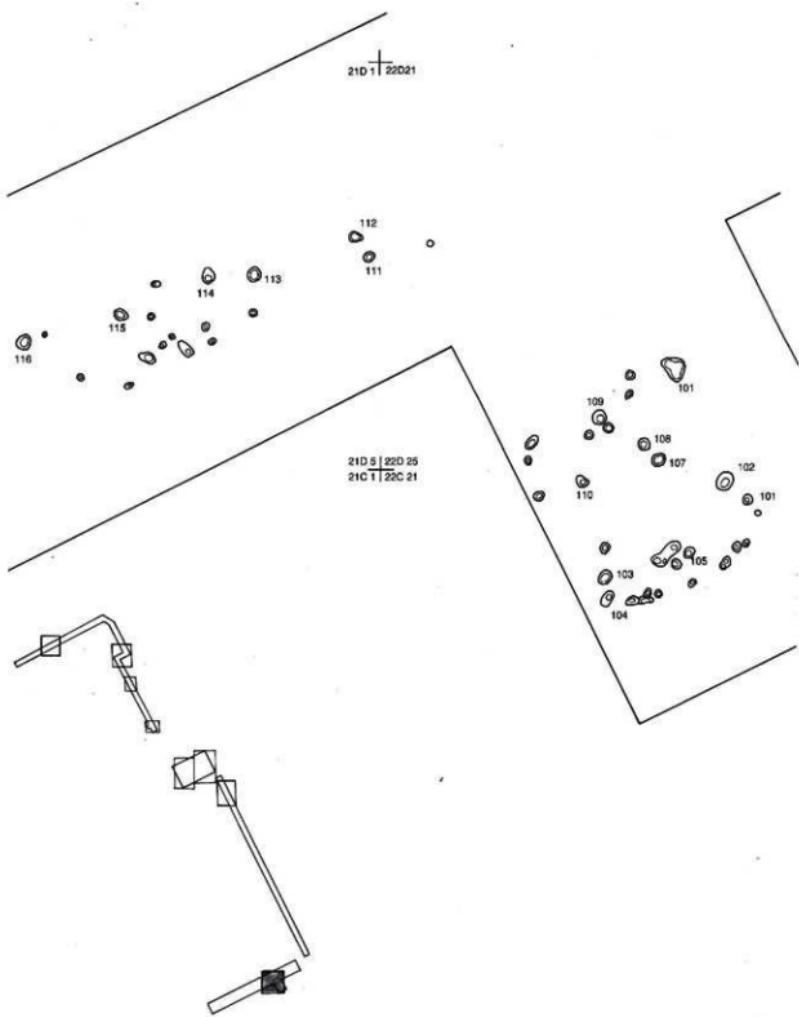
図版 6

遺構分割図 (5) A区4V'・12X付近

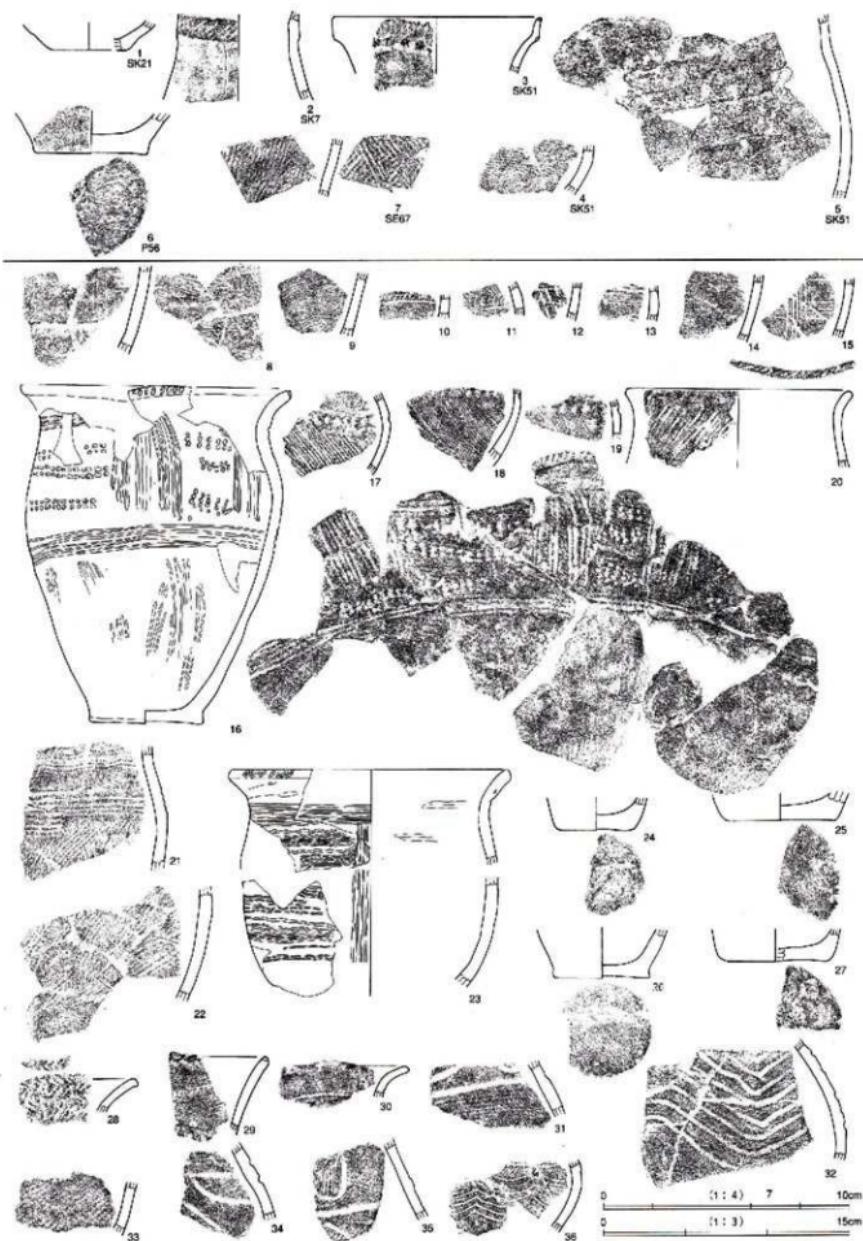


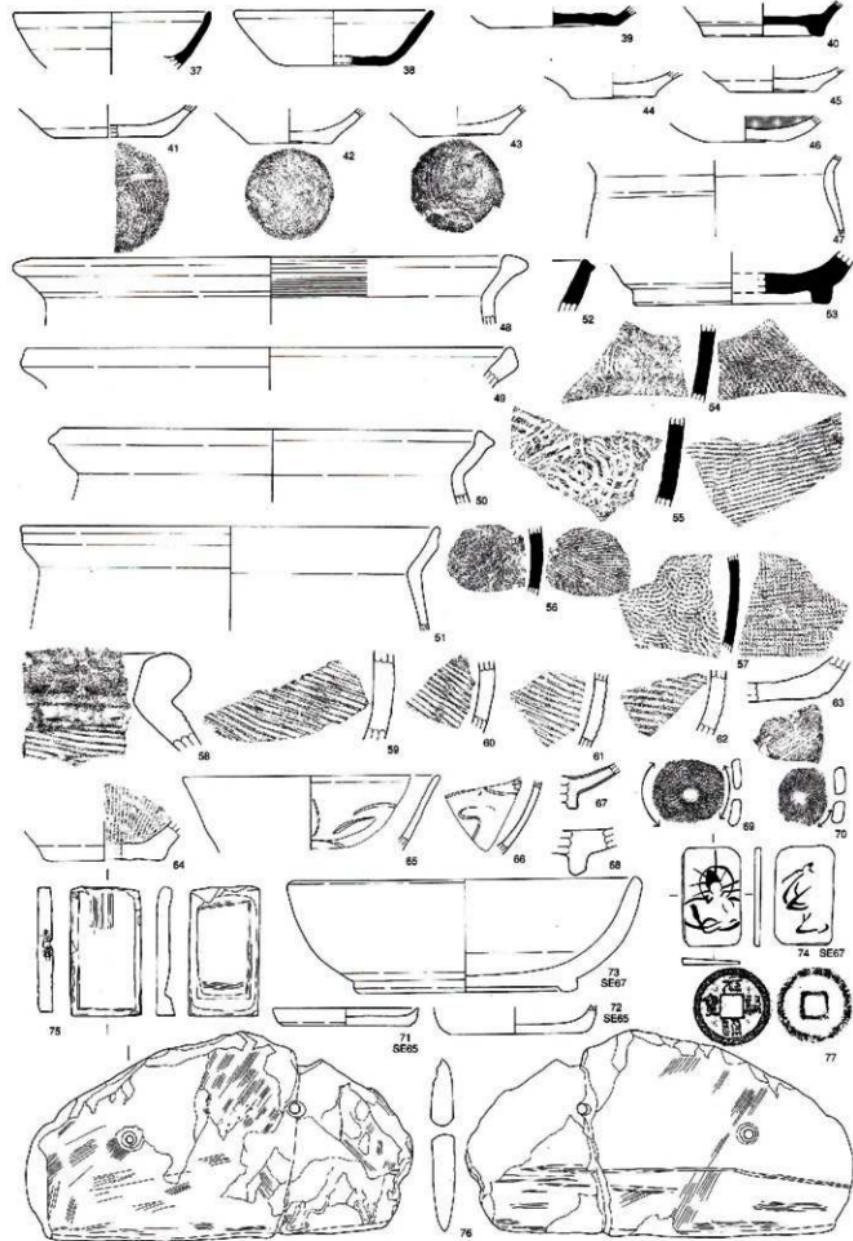
道路分割図(6) D区22C付近

図版7



(1 : 120)





0 (1:3) 15cm 0 (1:4) 54~57·64 10cm



水上遺跡遠景 北西から（集落手前の水田部分）



大型石包丁

写真図版 2

調査前状況 各地区完掘状況



B区調査前状況 北東から



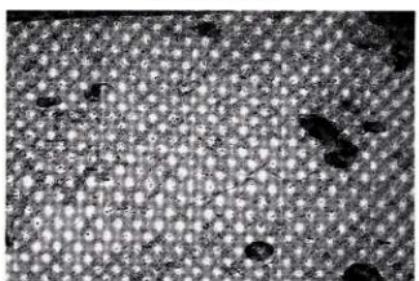
B区作業風景 北東から



B区石包丁出土状況



B区弥生土器出土状況



D区22C付近完掘状況 南西から



D区完掘状況 北東から



C区南側完掘状況 南から



C区SK3付近検出状況 東から



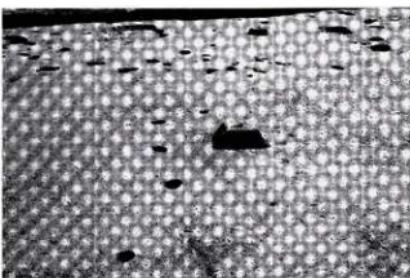
C区SK3付近完掘状況 南東から



B区完掘状況 北東から



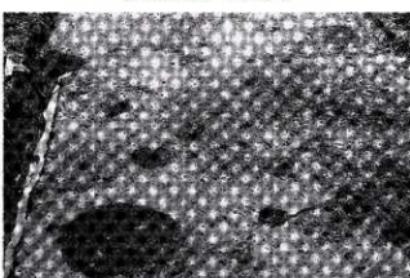
B区完掘状況 北から



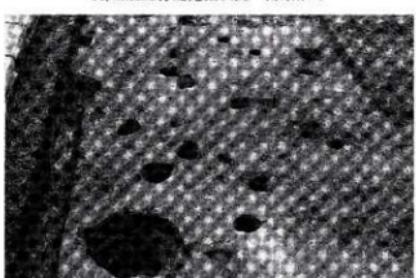
B区完掘状況 北西から



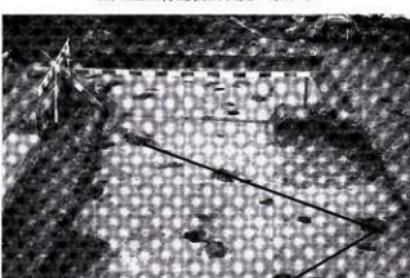
A区SK51付近完掘状況 南東から



A区SE65付近完掘状況 東から



A区SE65付近完掘状況 東から



A区P66・58・61完掘状況 東から



A区 5 V'付近完掘状況 北東から



A区 2 W'付近完掘状況 北東から



D区基本土層①



C区基本土層②



B区基本土層③



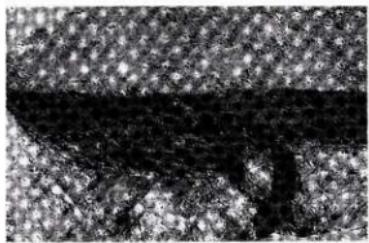
B区基本土層④



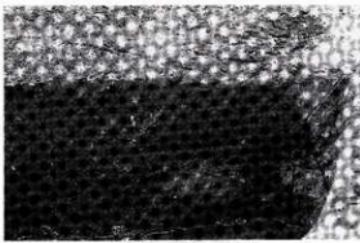
A区基本土層⑤



A区基本土層⑥



C区SK3断面 北西から



C区SK4断面 西から



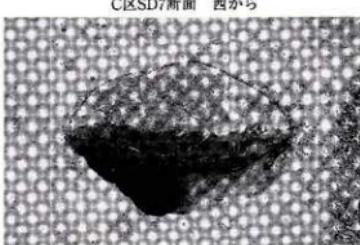
C区SK6断面 北から



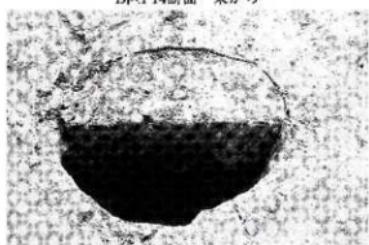
C区SD7断面 西から



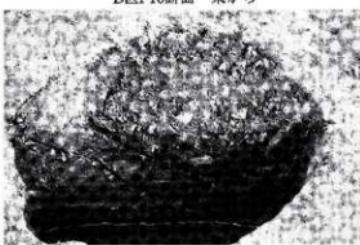
B区P14断面 東から



B区P16断面 東から



B区P18断面 東から



B区P23断面 北から



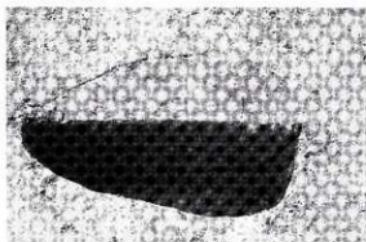
B区P25断面 東から



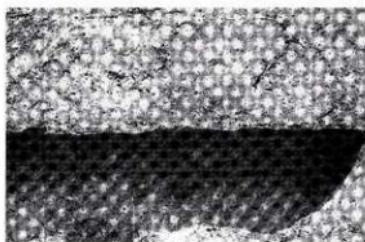
B区P30断面 東から

写真図版 6

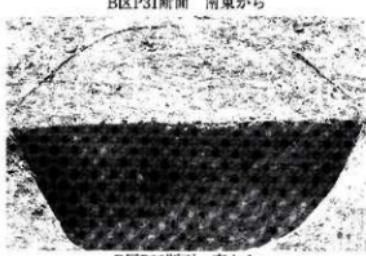
柱穴・土坑断面



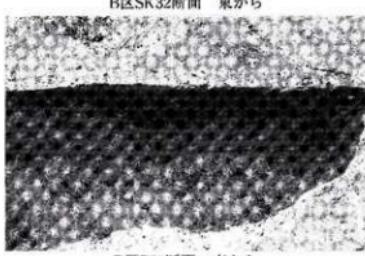
B区P31断面 南東から



B区SK32断面 東から



B区P33断面 東から



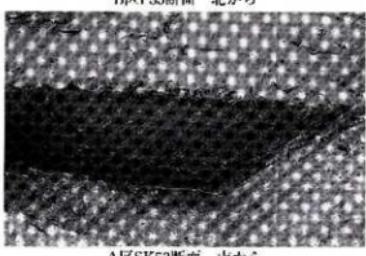
B区P34断面 東から



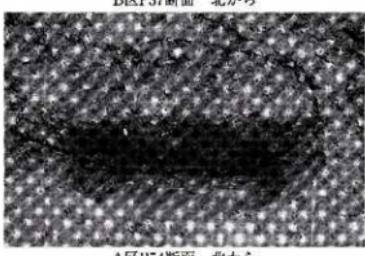
B区P35断面 北から



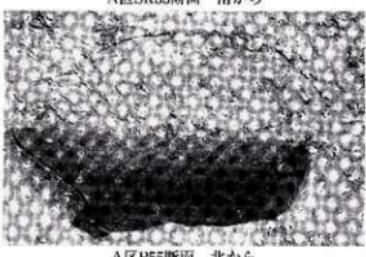
B区P37断面 北から



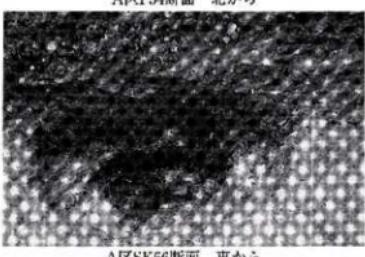
A区SK53断面 南から



A区P54断面 北から



A区P55断面 北から

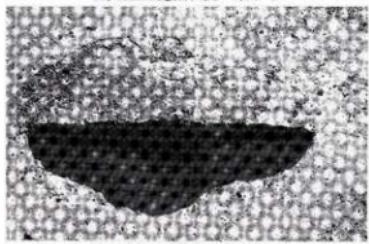


A区SK56断面 東から

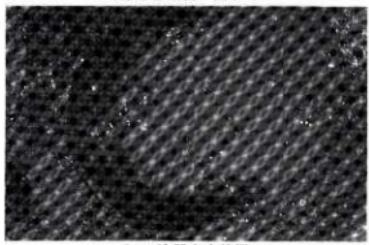
柱穴・土坑断面



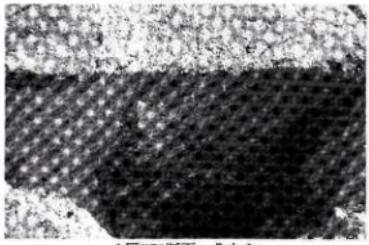
A区SE65完掘状況 東から



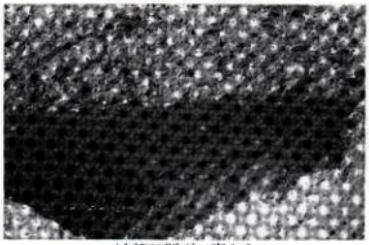
A区P66断面 西から



SE67漆器出土状況

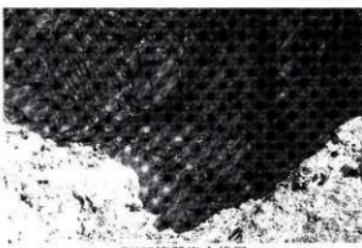


A区P70断面 北から

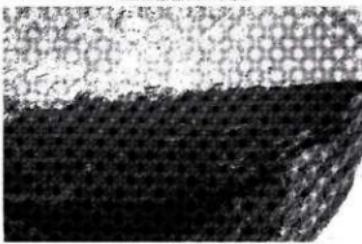


A区P77断面 東から

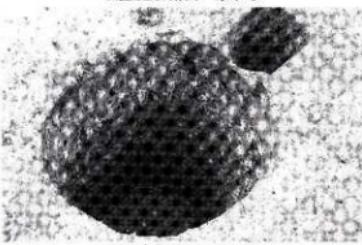
写真図版 7



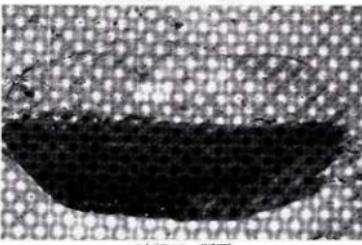
SE65漆器出土状況



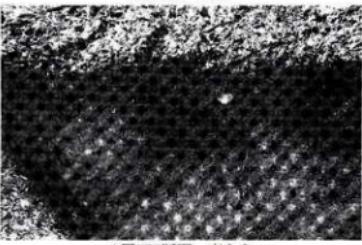
A区SE67断面 東から



SE67完掘状況 東から



A区P58 断面



A区P78断面 東から



報告書抄録

ふりがな	みずかみいせき							
書名	水上遺跡							
副書名	県営は場整備事業関係遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県刈羽郡小国町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	池田 淳子							
編集機関	小国町教育委員会							
所在地	〒949-5292 新潟県刈羽郡小国町大字法坂793番地 Tel 0258-95-5911							
発行年月日	2005(平成17)年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	北緯	東經	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡		(新座標)	17分		
水上遺跡	刈羽郡小国町 大字新町	15502	63	20030901～ 20031031	37度 27秒	138度 21秒	1,879m ²	中里南地 区は場整 備事業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
水上遺跡	集落跡	弥生時代・平安時 代・中世・近世	土坑、柱穴 井戸	土器・陶磁器8箱				

県営は場整備事業関係遺跡発掘調査報告書

水上遺跡

平成17(2005)年3月17日印刷

平成17(2005)年3月18日発行

編集・発行 新潟県小国町教育委員会

〒949-5292

新潟県刈羽郡小国町大字法坂793番地

Tel. 0258-95-5911

印 刷 株式会社 柏崎第一印刷

〒945-1354

新潟県柏崎市佐藤池新田213番地1

Tel. 0257-23-4394